

感情の強度 —情動の空間的政治学にむけて—

ナイジェル・スリフト *
(森 正人 **訳)

Intensities of Feeling: towards a spatial politics of affect
Nigel Thrift
Geografiska Annaler 86B (1), 2004: 57-78.

要約

本稿は都市が非人間で超人間の実体として考えられていること、政治学は統一なき共同体のプロセスとして理解されていることを考慮し、都市の生にとって付随的なだけでなく、中心をしめる情動の政治学を取り上げたい。それは3つの主要な部分にある。第一の部分は、このアプローチに一致する情動に対する主要なアプローチを描き出す。第二のそれは、情動の体系的なエンジニアリングがヨーロッパアメリカの都市の政治的な生にとって中心を占めていること、それがなぜなのかを考える。第三のそれは、可能になるかも知れない、別のある種の先進的な政治学を説明する。

キーワード: 情動, 政治学, 空間

政治的な反乱のその横で、人間が生きる無数の生において、どれほど多くの反乱がたぎっているのか
誰も知らない
Jane Eyre, 1847/ 1993 p.115

はじめに

都市は情動 affect の渦巻きとして考えられる。とりわけ怒り、恐れ、幸福、歓びといった情動はつねに煮えたぎり、上昇し、そして正常なレベルに戻るのであり、これらの情動はつねに持続する日常生活の一部として、大規模あるいは単純に現れうる出来事の中で立ち現れる¹⁾。それゆえ大胆に言えば、われわれはダイアナ妃の死、あるいは重要な得点が加わったスポーツスタジアムからの耳をつんざくよう

な叫び声によって引き起こされる大衆的ヒステリーを指摘できるかもしれない。つまらなく言えば、われわれは職場での日常的な感情的労働、交通渋滞でいらいらする叫び声やジェスチャー、テーマパークへ旅行に来た子どもたちの歓喜の笑い、警察による尋問が行われる容疑者の涙を考えることもできるかもしれない²⁾。

都市の活気あふれる要素としての情動がいたる所にあふれていること、われわれすべてが認識する相異なる傾向を持つ、ほとんどすべての都市の活動の

* Warwick 大学

** 三重大学

微妙な変化を考慮するなら、あなたは情動的な表れが都市の研究の大部分を形成するかも知れないと考えるかも知れない—しかしそれは間違っている³⁾。情動は多くの説明の中で姿を見せるが、それはつねに横にずれている。もちろんいくつかの尊敬すべき例外がある。ヴァルター・ベンヤミンによるナチスの感情的な緊急性の例証がすぐに思いつく。そうするとリチャード・セネットの *Flesh and Stone* における混乱した都市的身体の招集も思い起こされる。しかし一般的に言って、都市における情動の読解は小説や詩のトラックラインを必然的に必要とする。

なぜ都市のこの情動の領域を無視してきたのか。これまで情動の研究の歴史がなかったということではない。それは何世紀もの間、明らかに存在してきた。例えば、情動の場所は常に議論されてきた。芸術の役割に対するプラトンの議論が、最初の例としてすぐに思い出される。プラトンにとって、芸術は制御されない感情と情緒の発現のはけ口であるために、危険なものだった。とくに撃破それが情緒に訴えるために脅威である⁴⁾。疑いなく、多くの合理主義者や、ロマン化されたリアクションに注目し、熱情は好意的に捉えるべきかそれとも疑うべきかを思考した、マキャベリ、ルソー、カント、ヘーゲルといった極めて重要な人物たちにさかのぼることが出来る。同じく、さらに後ではあるけれど、科学者たちは情動の重要性を認識し始めている。少なくともチャールズ・ダーウィン（1998）が1872年に発表した『人類と動物の情緒の発現』以降、そして疑いなくそれ以前にも、情動の体系的な科学研究の歴史が重ねられ、そしてわれわれが今や情緒の心理学について知るべき事があると知っていると言うことはばかげたことかも知れないし、われわれが知らないことがあるということもまたばかげたことだろう。それでもやはり、これらの研究は多かれ少なかれ、はっきりとしたあらゆる種類の政治的判断で満たされてきた—どちらの熱情が健全で、どちらが疑わしくあるいは危険か、どの程度まで熱情は制約されずに許されうるか、許されるべきか、どのようにして熱情は増幅され抑制されうるか。

情動的なエネルギーで震えるアイデンティティやその簇生の問題を扱う昨今の都市研究で、情動はなぜ無視されるのか。一連の説明が思い浮かぶ。その

内の一つは、残余的な文化的デカルト主義である（あらゆる種類のジェンダー化された含意で一杯の）。つまり情動は、都市の至るところにあるわれわれの方法を決定する真の作用に対する、ある種の深みがない、混乱させる背景であるといった具合に。それは世界に対するわれわれの知的関心の一部になり得ない。第二の説明は労働力の文化的区分に関係する。創造的な芸術がすでにそれを行っており、それに付き従う必要はないというわけだ。第三の説明は、情動は簡単に活字にすることができない自己受容のような知覚的な領域に関わるからというもの。もちろん、その他の説明も存在する。

おそらくかつて、これらは有効な理由だと思われていたが、もはやそうではない。私はなぜ情動の無視が、過去と同じように現在も犯罪的であるか、その三つの理由を挙げたい。第一に、情動の創造と可動化は日常的な都市の景観に不可欠な要素となっている。情動は、都市生活の多様な領域における一層洗練された介入を可能にする再帰的循環に必須となっている。第二に、これらの知識は故意に展開させられているだけでなく、政治的な目的に向けて政治的に展開されている（主には金持ちや権力者によってだがそれだけではない）。審美的なるものとして描かれうるものは、ますます有効となる。第三に、情動は都市を理解するための一要素になっている。都市はますます「ざわめき声」を持ち、「創造的」であり、一般的に創造と直感を産出するよう期待されており、それらは経済的な兵器へと作り出されうるのであり、それゆえ、都市の情動的な領域の活発な設計は、変容の才能の利用として強調されている。都市は深い表現を見せる。三つの理由それぞれは、もちろん情動が常に都市的経験において不変である一方で、ある結果を巧みに処理しそうでもある。その結果とは、今や情動が都市的生活の基本的なメカニクと根底的な構成を提供する上で非常に重要で（Armstrong, 1999）、パイプとケーブルのネットワークとより類似した何かであり、こうしたことは、新たな情緒的歴史と地理の全ての様式を規定する中継ぎや接続の役割を常に演じている。

本稿では私は、都市における情動、情動的な都市について、ここまで述べてきたことについて、そして、これらのトピックに関するよりはっきりとした

思考の政治的な帰結—いったんその「政治的決定それ自体は」「人間」という観念が暗号へと還元される「一連の非人間的あるいは前主体的な力と強さによって生産される」(Spinks, 2001, p. 24) ことが受容された場合—を考えてみたい。私の目的は三つある。情動の性質を議論すること、都市と情動が単に自己内省の移動する領野やイデオロギーの密接した概念的エコノミーに還元され得ないある政治学を生産するために相互作用する方法のいくつかを提示すること、そして要約的なコメントの端緒を作り出すことである。それに加えて、本稿の最初に、私は実際に情動について自明視されているいくつかのポジションを描き出す。これは明らかに重要で、スピノザやダーウィンやフロイトといったそれぞれ異なる著名人を生み出した永く複雑な歴史を有している。しかしその課題の潜在的な大きさを考えれば、このことは完全なレビューを行うよりもむしろ、四つの重要な伝統を描き出すことになるだろう。本稿の第二部では、多様な情動実践の使用と乱用が次第に「政治的なるもの」の圏域としてわれわれが考えているものを変化させる、いくつかの多様な方法を描き出すだろう。とくに、私は四つの異なる、しかし関係的な、政治的目的に対する情動の操作が、単に広がっているだけでなく、政治的なるものの圏域として説明されるものを改めて定義する新たな種類の実践と知識によって、都市の決まり切った日課となっていることを指摘したい。これの実践、知識、再定義は決して素晴らしくも愛らしくもなく、補足的な情動が貢献するあまりにも一般的な解釈である。まさに、そのうちのいくつかはダウンライトのような恐怖となりうる。しかしこれは、情動を詳述するのに、今が重要であるという理由の一部であり一群である。少なくとも、ある装いの下では、情動の実践が持つ新たな意味の発見は、強力なものによる操作が持つ新たな全体的な意味の発見でもある。本稿では後に、すでに挙げた四つの伝統を用いながら、これらの発展がわれわれの政治学と政治的なるものの考え方を変えていることに、よりはっきりと注目する。私は、今や政治的になっている全てのものに関するばかりが議論をするつもりはないが、情動への移動が、新しい政治的領域や深さを明らかにし、前進させる可能性を少なくとも持つ新たな共同体を作り出すこと

への関与を可能にする、と議論する。それゆえ、本稿の最後から二番目の部分では、私はバーチャルなアートや Bill Viola の研究によって刺激された考えを用いながら、正当に作られるべき情動への先進的な政治的介入のいくつかを、より深く簡単に考える。最後に私は非常に簡単な結論を提示し、新種の遭遇とお祭り気分の「コスモポリティクス^{訳注1}」の試みが情動を含まねばならないことを議論する。

長々とした、そしてむしろ乾燥したレビューにならないように本稿を書き進める中で、私は過酷な決定を行わなければならない。第一に、一般的に私は近年のヨーロッパ・アメリカ社会に注目した。これは、文化を越えた比較に関する多くの研究（主に文化人類学からの）と、同じく感情の調子における大きな移行の証拠となるべき歴史的記録と、感情と見なされ名づけられるものさえを吟味する多くの研究を全般的に無視することを意味する⁶⁾。それゆえあまりに頻繁に、簡潔さの名の下、本稿は存在しない情動の常識的背景を仮定することになる。意識は文化によって、そして歴史を通して多様である (Geurts, 2002)。それゆえ、本稿ははっきりと差異に自覚的な領域における民族中心主義のリスクを冒している。

第二に、こうした研究の多くはしっかりとした経験的調査を背景に持つものの、私は主に情動の理論的説明を中心にする。とくにこれは、私が社会心理学や認知科学における膨大な研究を無視する傾向にあることを意味している。この研究は今や過去の未完の行動主義を乗り越えようとしているだけに不幸なことだが、それを統合することは補完という意味のみならず、新たな研究を必要とする (cf. Davidson et al, 2003)。

第三に、こういって良ければ、社会理論の歴史における特定の時期に生じた種別的な理論的背景によって、私のアプローチは制限されており、われわれはその中で以前に理解されていた「良い理論」を構成するものの要素を、しばしばぼんやりと捉え始めている。私は新たな概念的かつ倫理的源泉を生産しようとするいくつかの原則を引き出そうとしている。その主な理由は、次のことにかかわっている。

(1) 生態学からの距離は、決して社会・文化理論の主たる標識として見なされない (Turner, 2002)。もし

行為遂行的な力、とくに死ではなく誕生(そして創造)のダイナミクスが理解されるなら、存在の生態学的構成(いわゆる「生態的層化」)は説明されねばならない。

(2) 相対的に、自然主義と科学主義は決してひどい罪とは見なされない。この主たる理由は、システム理論、複雑理論、非線形の動態が取る多様な形式のような発展は、社会・文化理論と科学をより近づけるからである。もう一つの理由は、ますます社会・文化理論の歴史と科学は共通の先祖を持つようになってきているからである。例えば、1940年代のシステム理論は多様な方法で両方の領域を特徴付けるようになっており、結果的にわれわれはポスト構造主義がその先祖である構造主義によって刷新されるかのような時代に突入しているようである。

(3) 人間の言語は、コミュニケーションの意味に満ちたモデルのみを提供する、と前提できない。

(4) 出来事は少なくともいくつかの次に元々直面しており、多くの社会システムが持つ異常な権力にもかかわらず、「革命、抵抗、崩壊、陰謀、その他のものはどこにでもある」(Latour, 2002, p. 124)。それゆえ実験と偶発性の錬金術への転回は、そうした転回が適用するものを軽視する(Garfinkel, 2002)。

(5) 時間とプロセスは、その作用をより詳細に熟考する観念によって複雑化しているものの、社会・文化理論の以前の局面において今もお生き残っているために、研究上決定的なものとしてますます見なされている(Abbott, 2001)。それらの間での知識の形式の多様化とその取引が真剣に検討されている(Rabinow, 2003)。

(6) 空間はもはや「グローバル」から「ローカル」へと動く、入れ子状のヒエラルキーとして見なされるべきではない。スケールに依存したこの誤まった考えは、重要なのは結びつきであり、社会は多くの他者の外の「狭く標準化された結びつきにすぎない」(Latour, 2002, p. 124) という考えに取って代わられるべきである。

(7) 換言すれば、重要なのは別の思考であり、アクターの全てのやり方に対する再帰性を拡張し、単なる認識の特性ではないものとして再帰性を認識し、思想として考慮するものの本質的につきはぎと物質的な特性を理解することである。

情動とは何か？

ただちに直面する問題は、情動に関する安定した定義がないということである。それは多くの別の事

を意味しうる。これらは通常は、感情や情緒といった言葉と結びつけられ、当然のレパートリーとして憎悪、恥、妬み、ジェラシー、畏れ、嫌悪感、怒り、恥ずかしさ、悲しみ、嘆き、苦悶、プライド、愛、幸福、歓び、希望、驚きがあり、多様な理由が挙げられるだろうが、私はこれらの言葉が「情動」の単純な翻訳として十分に機能するとは考えていない。特に、私は根底的な感情(恥と似た)が主要な政治的暗号として機能しうるという考えからは距離を置きたい(Nussbaum, 2002)。

この後の簡潔で必然的に縮小されたレビューにおいて、私は個人化された感情の考えを扱うアプローチ(経験的な社会学と心理学の形式においてしばしば見受けられる)から離れ、力の幅広い傾向と描線の考えを扱うアプローチにこだわる。すなわち字義的かつ像的に動作としての感情(Bruno, 2002)。それゆえ私は、これらのアプローチの内の四つを熟考することにするが、私がおの効性に関して強力な審判を行っているとは仮定しないことは重要である。こうしたアプローチのそれぞれは、私が確かな欠点だけでなく、私が用いたい確かな力も持っている。しかしながら、これらのアプローチが共通して、一体化する人間個人の観念に基づくものとして描き出され得ないこと強調しておくことも重要である。むしろ、私の初期の研究の流れで言えば、それぞれは、個々人がその身体の部分(広い理解での)が応答し、それらが参与する出来事の諸効果として一般的に理解される「非人間」あるいは「超人間」の枠組みにひつついている。明らかにしておくべき別の要点は、これらのアプローチそれぞれは他者との結びつき(ある時は強く、ある時は弱い)を持っていることである。そして、最後の要点を書き記しておこう。それぞれのアプローチでは、しばしば間接的かつ非再帰的に情動は思考の一形式として理解される。このことは事実だが、その思考はすべて同じである。そして同じく、それらが作り出す空間の様式全ては同じ方法で、思考の手段として、そして活動中の思考として考えられねばならない。情動とは世界に関する別の種類の知性だが、それにもかかわらずそれは知性であり、それを非合理的なるものに格下げたり、以前に試みられたように荘厳なレベルにまで持ち上げたりするは、ともに誤った考えである。

私が提示したい最初の情動の解釈は、外的な裏地としての可視的な行為を生産する一連の身体化された実践として情動を捉えるものだ。この解釈は、まずは現象学的な伝統を受け継いでいるが、相互作用と解釈学の痕跡もとどめている (Cf. Redding, 1999)。その主たる関心は、日常生活において感情が生じるプロセスを描写することであり、身体的な状況とそのプロセスによって主に与えられる持続的な生成の十分な表現／美学的な感情と行為として理解される (そして情動の構成要素として理解される)。これは過去に感情の社会学を悩ませた二つの問題から逃れている。すなわち脱文脈化の問題と表象の問題である。第一のケースでは、文脈が情動の構成において重要な要素のように思われるという問題がある。非常に頻繁に、感情の源泉というものは身体のどこか外側、あるいは設定それ自体からやって来るように思われるが、この設定はアンケートやその他の道具などの方法によって無効になる。第二のケースでは、感情はおおむね非表象的だという問題がある。すなわち、それらは「他者との関係において、発話が隠すことのできないものの公的な証拠」 (Katz, 1999, p. 323) である。

研究はほとんど常に、人びとがその感情をどのように話すかという分析で終わる。もし感情に関して特別な何かが存在するなら、それらが共通して発話の過程で生じるとしても、それらは語られず、表現の形態でさえもなく、それらは語ることでは捉えようのない、生じつつある何かを表現するための方法なのである。歴史研究や文化研究はともに、テキスト、象徴、物質的客体、感情の表象としての生の有り様を分析するとき、感情的な経験を理解することの難問を省略している。 (Katz, 1999, p. 4)

表現に富む存在の外側には時間は存在しないので、状況と応答の認知は絡み合っており、ある種の応答-能力」 (Katz, 1999)、他者の行為に非常に依存する身体的源泉の感覚中枢の巧みな利用を前提する (まさにそれは、われわれがもっとも頻繁に自分自身がなすことを捉えるそうした再-作用を通してのものである) ⑧。大体的場合、この応答-能力は不可視だが、それが顕著になったときにはそれは強力な感情を刺激する。

赤面、笑い、泣くこと、怒りは顔面上に表れ、顔面を覆うことによってそれは通常は感情的な基層を隠す。感情をなすことは身体的な境界を壊し、涙が止めどなく溢れ、怒りが爆発し、笑いがこみ上げるプロセスであり、指定された関与の源泉としての本能が持つ断固たる関与である。 (Katz, 1999, p. 322)

別言すれば、それは、世界が思考されることを通してあるいはそれとともにある、そしてたとえ常には名付け得ないものであっても何か別の物物を感じることができる、豊かな精神的な配列に由来する。

ある人と世界との間には、新たな言葉、全体的に感じられるもの、社会的な契機における新たな織物、緊急的に変化する経験においてそしてその中で他者との関係性が存在する。ある種の変質は、自己が新たな容れ物に入る中で、あるいは社会的存在の変化した状態へと向かう道筋のための一時的な肉体を引き受けるときに生じる。第一に、われわれの分析に必要なことは詩的な装置を所有することである。 (Katz, 1999, p. 343)

情動の第二の解釈は、今やヨーロッパ-アメリカ的な主題が繰り返し自己を描き出すものの一部にその語彙がなっている中では、文化的にもっともよく知られるものである。それは通常は精神分析的な枠組みと結びついており、また欲動の観念に基づいている。しばしばそれは、人間の精神的な欲動-セクシュアリティ、リビドー、欲望-は人間のモチベーションやアイデンティティの根本的な源であるというフロイト的理解に従う。感情は第一に、潜在的なリビドー的欲動の媒体であり、あるいは表れである。「欲望」のテーマのヴァリエーションである。しかし、情動を欲動にまで還元するような概念化は、全く不毛になろう。Sedgwick (2003, p. 18) が言うように、こうした動きは「質的な点において非常に困窮しうる考えの、図表的な鋭敏さを容認する」。

Sedgwick はこの問題を、シルヴァン・トムキンス Silvan Tomkins (Demos, 1995; Sedgwick and Frank, 1995) の研究へと立ち戻ることによって解決しようとしている。トムキンスは、欲動と情動的な体系を区分する。欲動的な体系は相対的に狭隘に制限し、特定の目的に集中する中では有益で (呼吸、飲食、睡眠、排泄)、時限的で (これらの活動の度に止まることは、多かれ少なかれある時間の区切りの後に有

害な結果が生じるだろう)、特定の対象物に集中させられる(大気で呼吸したり水を摂取したり)。それに対して、怒りや楽しみや興奮や悲しみや恥じらいや苦悩といった情動⁹⁾は、あらゆる目的(そうしたものの一つとしてそれら自身の覚醒を単に刺激することもある—トムキンスはそれを自目的機能と呼ぶ)をカバーし、熟考のもとその目的を絶えず再定義し¹⁰⁾、欲動よりも時間に関して一層の自由を持ち(怒りのような情動はしばらくしか残らないだろうが、何十年にも及ぶ仕返しを動機付け得る)、多くの相異なる種類の対象に集中しうる。

情動は事物、人びと、考え、感覚、関係性、活動、野望、制度、その他に他の情動を含む多くの他の事物に付属しうるし、実際にそうしている。それゆえ人は怒りによって興奮し、恥ずかしさにうんざりし、喜びに驚かされうる。(Sedgwick, 1993, p. 13)

トムキンスにとって、情動とは想像上は主要な欲動の体系に従属していない。多くの場合、欲動の体系の明白な緊急性は、必然的な増幅器として活動するしかるべき情動とのその結合からもたらされる。まさに情動とは、

あらゆる欲動がなりうるもの以上に因果的であり、あるいはより一層独占的である。……フロイトが無意識や Id に依るものだと考えた特性のほとんどは、実際には情動の体系が持つ顕著な側面である。……情動は強欲さと極度の不安定性、不規則性と気むずかしさの両方を可能にする。(Tomkins cited in Sedgwick, 2003, p. 21)

重要なことは、トムキンスにとって情動の主たる場は顔面だということである。「私は今や一般的に言って皮膚、とりわけ顔面の皮膚に注目するようになっている。というのは情動の感情を生産するのにもっとも重要だからだ」(Tomkins cited in Demos, 1995, p. 89)¹¹⁾。しかしトムキンスにとって、顔面は何か別のものの表現ではなく、それはプロセスにおける情動であったことを理解しておくことは重要だろう。

情動の第三の解釈は自然主義的で、常に生成する世界における相互作用を通して能力を付け加えることに依存する。それは何をおいてもスピノザと、そ

してその後にドゥルーズによるスピノザの近代的な人性学的な再解釈に、普通は結びついている。

スピノザは、デカルトによって提示された身体を非物質的な精神や心性によって活気づけられるものとするモデル、世界は外延(デカルト派の空間としてわれわれにおなじみの幾何学的空間に位置づけられた客体の物理的領野)と思考(客体から「事物の思考」としてある意識を区別する特性)という二つの実体から成るという理念を持つ忠誠的なデカルト主義に対する挑戦からスタートした。

対照的にスピノザは一元論者だった。彼は世界にはたった一つの実体、つまりその形態においては「神か自然か」しかないと感じていた。すなわち、人間とその他の事物は一つの進展する実体の様式にしかすぎないかも知れない。それぞれの様式はそれ自体の方法で空間的に伸張し、思考され、一定の方法で伸びていく。だからスピノザの世界では、すべてのものは思考と同時に成すことの一部なのである。それらは二つの登記において表明される同じものの様相なのだ¹²⁾。言い換えれば、知ることは身体の物理的遭遇と平行して進むのであり、相互作用の外側にあることを意味する。しかしスピノザは非合理主義者ではない。彼がここで目論むのはその活動を自然の中にまで押し広げることで、新たな方法で思慮深さを理解することである。

スピノザの形而上学は、われわれが今や人間の心理学と呼ぶものの特定の観念をともなっていた。スピノザにとって人間の心理学は多種多様であり、多くの単純な身体の詳細であり、それゆえ現在出現することを要求されているであろうものを指し示す相互作用の外側で生じている複雑な身体である—それは他の段階には存在しない、より高次の組織において権力を示す包容力である。「個人はその数を固定された明確な特性(伸張的かつ質的)によって特徴づけられ、さらに不明確な数の情動に対する包容力を所有し、さらに他人によって影響を受ける」(DeLanda, 2002, p. 62)。つまり、多様な心理は個人の身体と別の限りある事物との間で生じる無数の遭遇によって、絶えず修正され続けているのである。そこで生じるある種の修正の確かな性質は、同時に他の複雑な身体要素でもある個々人である得る諸関係に依存するだろう。スピノザは、影響を及ぼし

及ぼされる、こうした遭遇が持つこの活発な表出を、身体と思考の両方である感情や刺激・情動という言葉で描き出す。

感情とは我々の身体の活動能力を増大しあるいは減少し、促進しあるいは阻害する身体の変状〔刺激状態〕、また同時にそうした変状の観念であると解する（スピノザ『エチカ 上』, 1951, 167）。

それゆえ、遭遇の活発な表出の特性として定義される情動は行為とよく似た身体と精神の能力における増減の形態を取るものであり、積極的—そしてそれゆえその能力（「喜び」や幸福と見なされる）を増やす—にも、消極的—そしてそれゆえその能力を弱める（「悲しみ」あるいは不快と見なされる）—にもなりうる。それゆえスピノザは「感情」を応答や状況の領域から切り離し、その代わりに実体のその属性の感情としての、そして多かれ少なかれ存在の力としての行為や遭遇と結びつけた。それゆえそれらは確かに「自然」の、嵐や洪水と同じ秩序の一部となっている。

すべての事物—それがどんなものであっても—の本章を認識する様式もや5はり同一でなければならぬ。すなわちそれは自然の普遍的な法則および規則による認識でなければならない。……このようなわけで私は、愛、憎しみ、怒り、ねたみ、哀れみ、その他精神をかき乱す感情のようなものとして熱情を見なしている……それは、雰囲気の本性への帰属と同じようにして、熱、冷たさ、嵐、雷におけるのと同じ仕方ですれに帰属する、特性である（Spinosa, *Ethics Pref.*: C492；邦訳該当箇所未確認）。

しかし、情動はそれぞれの遭遇において別様に身体や精神に表れるだろう。身体に関して言えば、情動は遭遇を構造化するので、身体は特定の方法で配列される。精神については、多かれ少なかれ正確で権利を与える理念間の諸関係から生じる一連の修正としての遭遇を、情動は構造化する。換言すれば、問題は情動的な関係性の構成である。それゆえ、「幸福感と不快感は所与の感情の基盤ではなく、音楽的調和以上のあらゆるものは、それを生じさせる同時的な傾向の基盤である。われわれが経験する多くの感情の名前は、コードと同種の組み立てられた幸福

感と不快感の相異なる関係に対して与えられた単なる名前である」（Brown and Stenner, 2001, p. 95）。

この関係性の強調は重要である。スピノザは「諸個人」を繰り返し参照した。彼が「連帯」あるいは「関係性」と呼んだものが、彼にとって優先的なカテゴリーである多様性としての身体や精神や情動の概念作用からすれば、それは明らかである。例えば情動は多様な存在間の遭遇において生じ、それぞれの遭遇の表出はこれらの存在が参入しうる構成の諸形態に依存する。

そうした関係性や遭遇から出発するという方法は、現代の社会科学において多くの共鳴を持っているし、人文地理学における近年の多くの研究の試金石を形成している。とりわけ、現代思想家、最も特筆すべきジル・ドゥルーズによってもたらされた、関係が持つ共通の複雑さを見つけようとする研究においてそれは示されている。ドゥルーズ（1988, 2003）は、事物は決して世界との関係から分けることができない、というスピノザの主張に、動物の認識世界に関するフォン・ユクスキュルのような著述家の仕事を参照し、人間存在に対する同種の思考を適応することによって、人性学的転回とでも呼ぶうるものを付け加えた。それゆえドゥルーズ（1988）は最も単純なフォン・ユクスキュルの動物、その存在理由が受動的な哺乳動物の血を吸うことであるダニを熟考する。それはたった三つの情動の能力を持つものとして表れる。光（枝の先にまで登り詰める）、臭い（枝の下を通り過ぎる哺乳動物の上に飛び落ちる）、熱（哺乳動物の身体で最も暖かい場所を探す）。そしてドゥルーズは同種の理由付けを人間存在に適応させる。しかしそこで彼は、われわれは現実には人間の身体に影響を与えるもの、精神が時間に先行する所与の遭遇において可能であろうこと、あるいはまさに、より一般的には人間存在が作りあげることができる世界についてどのような考えも持たず、それゆえ情動とは「人間になりつつある非・人間 non human」（Deleuze and Guattari, 1994, p. 169）であるという多くの留保を設ける必要があった。それゆえ彼は、人間存在が遊びに持ち込むことのできるであろう構成と合成を追跡することができる別の速度と深度の言語／実践に向かう。

要するに、私たちは、スピノチストならば、なにかをその形やもろもろの器官、機能から規定したり、それを実体や主体として規定したりしないということだ。中世自然学または地理学の用語をかりていえば、経度と緯度とによって規定するのである。どんな体でもいい、一個の動物でも音響の体でも、ひとつの心や観念でも、言語学の資料体でも、ひとつの社会対でも集団でもいい。私たちは、ひとつの体を構成している微粒子群のあいだに成り立つ速さと遅さ、運動と静止の複合関係の総体を、その体の〈経度〉と呼ぶ。ここにいう微粒子(群)は、この見地からしてそれら自身形をもたない要素(群)である。私たちはまた、各時点においてひとつの体を満たす情動の総体を、その体の〈緯度〉と呼ぶ。いいかえればそれは、[主体化されない]無名の力(存在力、触発=変様能力)がとる強度状態の総体のことである。こうして私たちはひとつの体の地図をつくりあげる。このような経度と緯度の総体をもって、自然というこの内在の平面、結構の平面は、たえず変化しつつ、たえずさまざまな個体や集団によって組み直され再構成されながら、かたちづくられているのだ(ドゥルーズ, 1994, 224)

この常に切迫したスピノザ的-ドゥルーズ的な情動の考えは、Massumi (2002, pp.35-36, my emphasis) が次のように書くときにより明確になる。

情動は現実に存在しそれらを具体化する特定の事物の中に固定された(そしてそれによって機能的に限定された)仮想的な統合的なパースペクティブである。情動の自律性は……その開放性である。情動はその活力、もしくは相互作用の可能性がそうであるような特定の身体の中で限定性をはぐらかす自律性を持つ。現実の結びつきもしくは閉塞の機能を実現していく、形状化され、適格化され、条件付けられた認識と認知は、情動の占領であり閉鎖である。感情はそうした占領—常にそして何度も逃走する何かがあるという事実—の最も強烈な(最も縮小された)発現である。何かは具体化されず分割されえないままだが、あらゆる特定の機能的に結びつけられたパースペクティブに同化されることもないまま残る。これこそが、ある人が自身とその活力との結びつきにおいて、最も親密で共有不可能であるその全き点において、すべての感情は多かれ少なかれ方向感覚をうしない、人間の外側にあるものとしてそれが古典的に描写される理由である。……現実に存在し構造化された事物はそれらを避ける中でそしてそれをおして生きている。その自律性は情動の自律性なのである。

情動の回避は、その占領である認識と並行して認識

されずにはいられない。この認識の側面は規則正しく、出来事の中に局所化される。……それが規則正しいときに、通常それは消極的な言葉、衝撃の形状(結びつきの機能の突然の障害)として描写される。しかしそれはまた、あらゆる出来事を伴う、しかしながら日常的な背景の認識のように、継続的でもある。情動的な回避の継続性が言葉に表されるとき、それは積極的な含意を持つ傾向がある。というのも、それは人間が持つ活力、人間の活動性の、可変性の感覚にほかならないからだ(しばしば「自由」と表される)。人間の「活動性の感覚」は継続的で無意識的な自己認識である(無意識的な自己再帰性あるいは自己言及性)。それはこの自己認識、その名付け、意識の形成の認識であり、それにより情動は効果的に分析される—ある語彙が、微少だが、その認識からの逃避が認識されずにはいられないものを供給される限り、人が生きている限り。

私は、われわれがダーウィン主義と呼ぶだろう、情動に関する最後の解釈を強調したい。ダーウィンにとって、感情の発現は普遍的で、進化の産物であった。われわれの表情も感情も人間存在に必ずしも特有というわけではない。他の動物は同じような感情を持っているし、動物が生産する表情のいくつかはわれわれ自身と似ている。顔面と声をともなう表情、そしてより小さな程度の身体の姿勢や動きは、多くの横断-文化的な特徴を持つ。対照的に、典型的に手の動きを伴うジェスチャーは普遍的ではない。つまり一般的には、それらは言語と同じように文化ごとに多様である。

感情に関する科学的研究が盛んになったけれど、ダーウィンによる感情の研究は何百年の間、無視されてきた。しかし、それは近年、特に Ekman(1995, 2003; Ekman and Rosenerg, 1997)の研究と関わりながら復活している。Ekman が言うように、ダーウィンの研究は三つの理由で重要である。第一に、それは「なぜ」という問いに答えようとしている。なぜ特定の表情は特定の感情と結びつくのか。第二に、それは独特の量だけでなく(ダーウィンは膨大な量の国際的な一致を利用した)、独特の質を持つ広範な証拠を利用した。ダーウィンによる膨大な量の情報源を用いた顔面の版画や写真の利用は、象徴的になった。第三に、彼は、動物から人間への感情の下降という筋道があると力強く主張したが、それは行動のために有機体を整備する手段として、ある意

味で進化に対する批判に答えようとする欲望の外側で生じた主張としての、情動的表現の進化の外側で生まれている。

ダーウィンがその研究から省いたものは、感情が持つあらゆる伝達の側面であり、それは今日付け加えられている。全体的な文化相対主義に直面しながら飛び立った新ダーウィン主義は、すべての文化には少なくとも五つの感情が存在すると論じる。怒り、恐怖、悲哀、嫌悪感、喜びであり¹³⁾、これらの感情それぞれは共通の顔面の表情で示される。これら共通の顔面の表情は内的な生理的変化の無意識的サインで、単なるコミュニケーションの範囲という、結論のない議論ではない。しかしこれは、感情は文化的経験によって影響を受けていない本能のようなものとして作用すると言っているわけではない。「社会的経験は感情に関する態度に影響を与え、表示と感情のルールを作り、最も急激に感情を生じさせる特別な出来事を展開し調整する」(Ekman, 1998, p. 387)¹⁴⁾。とくに、別の文化は感情に対する同じ言葉を持っていないだろうし、全く別の方法で特別な感情を表明するだろう¹⁵⁾。さらに特定の感情を誘発する特別の出来事は、もちろんのこと文化の間で全く異なる。例えば嫌悪感は何が良くて汚いかという文化的規範によって、全く別の種類の食べ物によって引き起こされる。

だから、四つのそれぞれ異なる情動の観念があり、それぞれは世界に割り込む感覚に依存しているものの、その感覚はそれぞれ異なる。身体化された知識の場合、その割り込みは人間身体の明確な武器庫によって与えられている。情動理論の場合、それはフロイト主義理論の欲動よりもむしろ、生物学的に差異化された積極的な情動と消極的なそれによって与えられる。スピノザやドゥルーズの世界では、情動は現れの自然な力に類似した相互作用の能力である。新自由主義的世界では、情動は顔面に囚わらず描かれた深在性の生理的変化である。こうした異なる考えが別の手がかりや存在論さえをも暗示しているように思えることを前提として、どのようにすればわれわれは情動の政治学を考えることができるかもしれないだろうか。とっかかりに、われわれは政治的な景観をあわだちく再定義しているヨーロッパ・アメリカ的な文化の情動的論調における全般的な変

化を考える必要がある。それが次節で行うことだ。

情動の政治学

情動は常に政治の中心的な要素で、思考と技術と情動を多様で強力な結びつきでもつれさせる多くの強力な政治的テクノロジーの主題でもあり続けてきた。一つの例として、多様な軍事訓練の形式を通しての攻撃の動員がある。十七世紀以降、こうした訓練は軍事テクノロジーの「進歩」による密集行進法のように、いっそう洗練されてきた。戦場にいるほとんどの人びとにとって普通の行為ではないかもしれないけれども、こうした訓練は、戦士や戦闘員を殺すことを状況づけるために用いられてきた。これらの訓練は恐怖をコントロールする身体的な状況付けと関わっている。それらは怒りやその他の攻撃的な感情を特定の状況へと導く。それらは激しい怒りが破裂している間に報復の殺人を静め、軍隊が従来はもたらしてこなかった特定の効果(例えば、射撃率や高度の殺傷率)をもたらした(Keegan, 1976; Grossman, 1996; Bourke, 2000を見よ)。

これは極端な例に見えるかも知れない。しかし、今になって発見され始めている多くの隠された感情的な歴史にもかかわらず、私はこれが情動のより一層の工学技術への傾向の説明に役立っていると考え(cf. Berlant, 2000)。同じようなプロセスは、家庭内あるいはより大きなスケールといった、他の多くの社会的生活の舞台で生じてきたのであり、それらは、われわれが政治的なものと呼ぶものの包装材料は「政治的な態度と発現は、単にある政治的な意図の筋道を再生産しておらず、また真実のイデオロギー的圏域の中で完全に回復され得ない強力な入り伝る身体的リアクションによって、部分的には条件付けられている方法である」(Spinks, 2001, p.23) ことに気づくよう、ますます拡張されねばならないと提示するのに十分である。この節で私は、四つの展開に言及することで、どのようにこの包装材料が都市で拡大しているのか示したい。最初のもものは、現代において登場しているそうした政治学の形式における一般的な変化を構成しており、この変化は情動を政治的なもののますます可視的な要素

にする。とりわけ私は、生活の領域を「選択」と呼ばれる新たな一連の責任の問題にする一般的な動きと一致させる、いわゆる「選択のエージェンシー」と「混合作用的レポーター」を指摘したい。Norris (2002, p.222) が言うように、

十九世紀から二十世紀初頭の間、参政権の拡張、政治的な動員と、とりわけ特別な議会の政党編成の展開における代表的政府における政治的発現に対する伝統的な流路の勃興、安価に流通する新聞の広がり、そして組織化された労働者の運動、市民団体、ボランティア・グループ、宗教団体のような市民社会における伝統的な集団の成立を促した。1940年代と1950年代までに、これらのチャンネルは根付き強固になり、市民と州を制度化された民主主義の中で結びつける主要な制度として自明視された。人間の資本と社会的近代化の水準の興隆は、今日、より教育水準の高い市民を意味し、……それは選択のエージェンシーへの忠誠のエージェンシー、選挙活動と抵抗的政治を結びつける選挙の混合作用のレポーターからますます移行している。ポスト産業社会では、とりわけ若年層がその両親やその両親の世代に比べると政党や境界といった伝統的なエージェンシーを通してその政治的なエネルギーと結びつこうとせず、新たな社会運動、インターネットの活動、脱国家的な政治的ネットワークをますます介することで、多様な臨機応変で、文脈的で選択の特別な活動を通して自分自身をより表現するようになってきた。因習的な指標では、批判的な市民が、……別の表現手段を通してより活発に関与するようになってきているのと同時に……集団的な枝状の政党へと向かう方向において忠誠心や経緯を失い始めていることに気づけない。

こうした選択の政治学の新たな形式は、都市の政治的圏域として因習的に見なされてきたものの拡張に依存している。例えば、今日の政治的なものは、いつも決まって文化-自然の関係の形式すべて（例えば環境の政治学、動物の権利の政治学、選択賛成あるいは反生命といった政治）を考慮に入れている。同様に、政治的なものとして勘案されるものの再定義はこうした情動的インパクトを減らそうとする類似したアピールと同時に、メディアに極端に依存した明白な情動的アピールのための場所を可能にしている（例えば、科学への参照によって、イメージなどの「現実」の脱構築のための多様な方法によって）(Boltanski, 2002)。

これにより私は、政治学の極端で継続的な媒介化である第二の展開に向かうことになる。われわれはメディアに包まれ満たされた社会に生きている。最も重要なことは、多くの日常的な場所一家屋のほとんどすべての部屋から医者待合室まで、空港のラウンジから店舗やショッピング・モールまで、飲み屋から多くの職場まで (Knorr Cetina, 2001; McCarthy, 2001), エレベーターの中から建物全体まで一から、今やわれわれを凝視するスクリーンの影響を避けることは難しい。だから、そのスクリーンは、スクリーンの力を強調する初期の映画理論の強力な解釈 (Kracauer, 1960; Balasz, 1970) と、認知のプロセスが多様な因習や様式を通して制限されているという微妙な解釈とを強調する、後の認知的な映画理論 (Bordwell and Carroll, 1996; Thrift, 2004b を見よ) の間のどこかにあるような「ポスト・社会的」¹⁶⁾な関係の全体を付け加えるのと同様に、恋人、教師、無表情なわけ役に以前なら帰せられていた多くの役割を担っているということだ。この媒介化は重要な効果を持っている。McKenzie (2001) が指摘するように、その最も重要な効果は、近代的なヨーロッパ-アメリカ的社会とその政治形態の中心に行為遂行的な個人を記すことである。これは多くの方法で生じてきた。まず始めに、近代的なメディアの技術的形式は、その顔面あるいは声などの重要な情動的な場に集中することと、かなり頻繁に感情を象徴する身体の微細な詳細を拡大することの両方において、感情を前景化する傾向にある¹⁷⁾。今日の政治的な現前はそのような微細な差異をしばしば決定し、それらを全体なるものの支持へと導く。運動のある走線は意味の連鎖になりうるし、局所的に具体化され埋め込まれうるようになりうる。Massumi (2002, p.41 : 強調はスリフト) はロナルド・レーガンにおけるこの性質を観察する。

それゆえレーガンは、それほど多くの人びとに多くのものになりえたのだ。それゆえ有権者のほとんどは主要な問題に関して彼に反対するのに、彼になお投票しうるのだ。なぜなら彼は、有権者の居住地区でその選択の運動と意味として現実化されているから一あるいは少なくともその妥協として選ばれているから。彼は全ての抑圧に対する男だった。彼は主に信頼の空気のプロジェクトによって統治していた。それが、機能不全にもかかわらず、彼の政治のやり方が持つ感

情的傾向だった。信頼は捉えることができる生命の可能性としての序どうの感情的な解釈である。それは特別な感情の発現と生成である一人間の片方が理解された活力の自覚。レーガンは活力、仮想性、病氣中、妨害を発信したのである。

このように、政治的現前はますます、信頼性のインデックスになっている感情のパフォーマンスを強調する現前のメディア的規範に従っている。ますます、政治的正統化はこの種のパフォーマンスから生じている (Thompson, 2001)。そして最終的な点として、この種の現前はヨーロッパ-アメリカ的社會において共通となっている自我の「療法的」形式と一致している (Giddens, 1991; Rose, 1996)。まさに Nolan (1998) は、例えば感情的労働、感情の管理、感情の学習を重要な技術として認識することによって、古い官僚的な機械的テクノロジーの情動的な背景を疑い、ある程度まで取り除きながら、それが統治の重要なテクノロジーになっている程度にまで、この療法的あるいは「感情的」エートスがそれ自身をアメリカの國家の構造に埋め込んでいると論じる (Smith, 2002)。

機械の中にある生命は、古い〔伝統的な〕意味の体系が不可能だとアピールしている。その代わり、個人は感情の言語の内部から逃れ、それに言及するように促されている。だから、感情主義者のモチーフは「真実が合理的な判断あるいは抽象的な論法を通してというよりもむしろ、心情あるいは感情を通して捉えられる言明」なのである。それはデカルト主義の格言「我思う、ゆえに我あり」を感情主義的な「我感じる、ゆえに我あり」に置き換える特別な存在論を促す。この感情主義的な自己の理解は、個人が社会的な生活に参与し交信するという方法を形成する。現代の文脈では、jean Bethke Elshtain が考察するように「全ての点は個人の主体的感情の周辺を回っているようである—フラストレーション、不安、ストレス、充足感があるなしにかかわらず。市民は交代する。療法的な自己が広がる」。 (Nolan, 1998, p. 6)

このようにパフォーマンスの異種混濁的な知識は、新しい規律化の「分解された」様式、新たな権力と知識の層を構成する近代社會の中心舞台に移動する。こうした知識は多くの方法で権力を築きあげる—例えば、情熱を持ってメッセージを届けることによっ

て (実際、情熱はメッセージよりも重要なものとして配達されることがしばしばある)、新しい操作の微細な景観を提供することによって (Doane, 2002)、合図をする新たな可能性を加えることによって、そして一般的に出来事の外側に新たな空地を付け加えることによって。しかし最も重要なのは、それらは管理された柔軟性としての開放性をそれほど要求しない方法で、一連の異なる状況を行為することが試されている「次元分裂的」な主体を形成する新たな方法を提供する¹⁸⁾。McKenzie (2001, p.19) は次のように言う。

行為遂行的な権力と知識によって生産される欲望は、特徴的な規律訓練型メカニズムによって型取られるわけではない。それは抑圧的な欲望ではない。その代わりそれは、重複的で時には競合的な体系による多様な限界の閾値を断続的に調整し、それを加えるような「過剰」である。さらに、多様性は単に統合されるだけでない。というのは、統合はそれ自体多様化されるようになっているからである。同じように、逸脱は単に規範化されるのではない。というのは、規範は、それら自身の逸脱と脱線を通してそれらに作用したり、それらを変形させたりするからである。行為遂行的な権力のメカニズムは、定定的で固定されたものよりも遊牧的で柔軟であること、その空間は閉鎖され物理的であるよりもネットワーク化されデジタル的であること、その時間性はただ連続的であるとか単線的であるのではなく多リズム的で非単線的であることを理解したとき、われわれはこの展開をより一層理解することができる。行為遂行的な層では、演じるための不一致な課題の間をスイッチバックしたり前進したりしながら、異なる評価の格子間をただちに行き来する—等々。

第三の展開は、媒介化と行為遂行的な知識の登場と密接に結びついている。以前は「政治的」と考えられてこなかった感覚的な登記における推測の新たな形式の成長である。とくに、全てのテクノロジーの到来によって、そこで情動が成長し、その外側でそれがしばしば続けられる小さな空間と時間が可視的になり、拡大されるので、それらは意図的に効果を及ぼされるだろう。軍事演習といった実践を通して軍事的身体を状況づけることへの関心が高かった十七世紀まで遡って、現象性のこの地には前哨地がすでに構築されていたと言うことは可能だが、私

は植民地化の主要な局面は十九世紀まで遡り、四つの展開に依存すると言いたい (Thrift, 2000)。第一に、一連のマイクロ-地理として身体を考えることを同じく可能にしてきた数々の新たな科学的道具によって、身体の小さな空間を察知する能力が存在する。第二に、小さな身体の運動を察知する能力との結びつきが存在する。マーレーMarey やマイブリッジMuybridge などの写真作品から、カメラがそれ自身の時間と空間の政治学を押しつけてくるわれわれの時代まで移動すると、われわれは、時間とはたとえしばらく機能停止しようとも、微細に断片化された枠組みであり、速度を上げたり緩めたりすることが可能なものと考えることができる。第三に、無数の身体的な実践は、映画での演技、モダンダンス、モダンダンスが持つ執拗な平行線のテンポなどを含む「標準以下」の芸能芸術と特に結びつけられ、そうした小さな時間と空間の知識に依拠したり管理したりする存在になりつつある。ラバン式ダンス表記法やその他の舞踊記述法といった特別なパフォーマンスの表記法によって、この分刻みの動きは記録され分析され組み立て直される。それから最後に、身体のもっと微細な身振りと言話に関する一連の言説が、因習的な分析から近接学の親密な空間への転回、身振りの分析から「身体言語」の地図化への転回の中で発明されている。

このように、以前には不可視の、あるいは認知できなかったものは、小さな空間や時間において進行する行為に対してリップサービス以上の関心をますます寄せるようになってその新しい関心の構造を通して、新しい関心の構造を通して見えるものあるいは認識できるものとして構成されるようになってきている。ここでの行為は一秒ごとに身体の機知を利用する予期、即興、直観といった性質と関わっており、巧妙な管理に貢献する。このように、認知は、引き延ばされたり強められたり、広められたり濃密にされたりするから、もはや「緊急性、現前、定時性に関連しては考えられ」えない (Crary, 1999, p.4)。

同様に、この新たな関心の構造によって、皮肉なこと一層の速度への適応を通して十分に、われわれは今日「剥き出しの生」(Thrift, 2000) としばしば呼ばれるものに対するより一層の理解が可能に

なる。発見されていない地平は、次第に「0.5 秒の遅れ」の地平として姿を現してきた。これは 19 世紀半ばのヴィルヘルム・ヴント Wilhelm Wundt によって元々発見された「身体の予知」の時代である。

「ヴントは意識が構築されるまでに時間がかかるのを示すことができた。われわれは意識に遅れる」(Damasio, 1999, p. 127)。この洞察は、新しい身体記録のテクノロジーを用いたリベット Benjamin Libet により、1960 年代になって最終的に公式化された。彼はわれわれが行為しようとして決定する以前に、行為は動きの中に置かれていることを示した。1.5 秒という場合もあるけれど、「準備の潜在性の平均」は 0.8 秒である。別言すれば「意識が構築されるには相対的に時間がかかり、その瞬間性のあらゆる経験は後から遡った幻想に違いない」(McCrone, 1999, p. 131)。あるいは Gray (2002, p. 66) が言うように、「脳によってわれわれは行為の準備が可能になり、われわれはそれから行為の経験を有する」¹⁹⁾。

要約すると、われわれが見ることができるものは、具体化のその空間が、はかなくも決定的な契機、常に動く意識化以前の最先端によって拡大されているものである。この時間のはかない空間は、非常に政治的である。これまでのハイデガー、ウィトゲンシュタイン、メルロウ・ポンティ、ブルデュー、ヴァレーラによる研究は、世界(背景)の期待の構造が、複雑でしばしばはっきりとした政治的系譜を持つ身体実践によって確立されることを示している。最小のジェスチャーや顔面表現は、最大の政治的羅針盤を用いる (Ekman, 1995, 2003)。より近年の研究は、これらの身体実践が世界の身体的不安が持つ決定的な要素としての感情に依拠することを強調し、この理解を強めている。それゆえわれわれは今や、ある種の物質的な思考として感情を理解することができる (Doux, 1997; Damasio, 1999, 2003)。「われわれの献上を通して、われわれは暗黙の、身体化されたわれわれ自身の土台を理解しようと回帰する」(Katz, 1999, p. 7) ²⁰⁾。

結果的に、われわれは今や、ますます感知される時間の小さな空間、ある瞬間を形成する時間の空間を持つ。もちろん、いったんそうした空間が開かれれば、それは影響されうる。フーコーとアガンベ

ンが明らかにしたように、生政治は現代の西洋における権力の様式を中心である。しかし、今導入されるのは、マイクロ-生政治であり、新たな実体や制度全体を通して働きかけられるよう可視的かつ利用可能になった、0.5秒遅れのものから切り開かれた新たな領域なのである。この領域は、とりわけ予知に対する多様な能力の一部である多様な身体の位置のメカニズムを通して、すでに暗に政治的であった。今それは、とくにそれを目的とされている実践とテクノロジーを通して、はっきりと政治的になっている。

情動に関わる第四の展開は、政治的応答を作り出す都市空間の入念なデザインである。都市の空間と時間は、多数の源泉に由来しコード化された、実践的かつ理論的知識に即した情動的な応答を喚起するようにますます設計されている。これが常にあったのだということは可能だろう—モニュメントから勝利の行列まで、激情的な舞台から大衆による身体の誇示まで—、私もそれに同意する。20世紀には、身体を形成するための知識（上で言及したマイクロな生政治）の進化と複雑に絡み合うようになりながら、しばしば最もぞっとするような種類のある政治学において、空間設計の活動の多くが再び力を増してきた²¹⁾。しかし私が議論したいのはそれとは違って、情動的な反応に関する公式的知識（心理分析のような高度に形式的な理論的背景、あるいはパフォーマンスのような実践的な理論的背景からであろうとなかろうと）の重み、半ば形式的な装いの下で利用可能になってきた情動的な反応に関する多数の実践的な知識（例えば設計、照明、イベント管理、記号論理学、音楽、パフォーマンス）、そして大量のイメージとその他の記号や、利用可能なテクノロジーの広い範囲や、より一般的な出来事の記録という形において連動させられうる、非常に多様な使用可能な手がかりである。結果として、情動的な反応は、ほとんど何もないように思われるものの外側で、諸空間へと設定されうる。情動的な反応は決してはっきりとは保証されないが、これはもはやランダムな過程ではないというのも事実である。それは次第にそれ自身を経験へと引き込み、作動するように権力の新しい形式を生産する、景観工学の形式である。

政治的なものを変える

これら4つの展開とそれに類似したほかの発展は、政治的なもの実践（そして暗に政治的なものそれ自体の定義）に対してどのような意味を持ちうるのだろうか。この問題におけるアッシュ・アミンとドリーン・マッシーの論考に対してははっきりとした応答をするため、私は多くの移行を指摘したい。それぞれは無視されてきたのではなく、徹底的に実践的であるいは理論的な領域でもあるそうした領域でこれまでしっかりと維持されてきた。しかし今、あらゆる種類の企業や国家的な制度が、体系的かつ携帯可能でもあるこうした領域の知識の身体、生成の複雑な情動的情況の知識、新たな政治実践の構成要素たるべく結びつけられた「感情の政権」を公式化しようとしている(Thrift, 2003)。それゆえ、これらの展開をむしろ憂慮すべきこととして—そして新たな種類のなめらかな独裁体制へと導くものとして—みなす力の上で、それら自身の分析と政治的な課題を生産することは責務なのだ。「統一なき共同体」のプロセスとして民主主義を考えることへと向かう全般的な動きの一部として、私はこの責務を強調したい。

だけど、どうして課題を組み立てたらよいのだろうか。一般的な意味では、ある人は、目標はある種の「感情の自由」だと論じるかも知れない。しかしこの目標は、プラトンやそれ以前へと遡れば、感情の制約されていない表現は良いものではないというよく知られた認識によって、鍛え上げられるべきである。換言すれば、目的とされるべきは、個人的な感情をどうにかして最大化する単純なロマンティズムを乗り越える感情の航海である。そうした航海は少なくとも3つの契機と関わる。第一に、「出来事の競技者」を生産しようと目論む再帰性の形式で、フリーコーが「自己への配慮」(Rabinow, 2003, p. 9より引用)と分類した不自然で倫理的な再帰性の多様な形式を考慮に入れると、それが効果的な力になるためには、一連の規律訓練の中に置かれる必要がある。それはそれゆえ、事実上チャネリングと抑圧の多様な形式を取る。第二にそれは、Guattari (1995)が少なくとも次のように記すとき、その中に含まれたある種の実存的領域のより一般的な説明を求める。

偶有性、単純な因果関係とわれわれを包囲する状況と意味作用の抑圧を脱物質化し脱領域化する仮想的なるものの可能性、倫理、政治の豊かさにより掛かる倫理的な選択がある。それは突起性、不可逆性、再単一化に対する選択である。小さなスケールでは、この再展開は畏、貧困化、神経症におけるまさにカタストロフィの様式へと変転しうる。それはアルコール、ドラッグ、テレビ、終わりなき日々の性行為において、それ自身を絶滅させうる。しかしそれはまた、より集合的で社会的で政治的な他の行為を利用可能にしうる。

第三に、それは生産的なものに関わり、生の意味を進めようとする (Thrift, 2001/2004, 2004a, b)。生の意味は、悲劇と私的に取引するよりも、世界と肯定的に関わろうとする。それは、部分的には Bloch (1986, Vol. 1, p.143) が「生産的な現象」と呼ぶものの情動的な行使に必要な、希望の政治学である。「それはそれ自身の開かれた意識、全くもって意識化されていないものであり、その敏捷性において学びたいという欲求を演示し、その予見において注意深さやその場所の前面において洞察力さえも持つ可能性を示す」。これは、お望みならある種の実践ユートピアであり、前進する中で染みついた予想的な知性であり、傾向の感覚である。「その支持と共関係はプロセスで、それはその最も内在的な内容物に降伏してはいないが、今もなお進行中なのである」 (Bloch, 1986, Vol.1, p. 146)。

なぜこの問題にこだわる必要があるのだろうか。情動の政治学を生み出すためである。というのは、特別の方法で特別の制度によって形作られている個々人や集団にとって、莫大な感情的なコストと利益があるということは、全く以て明らかだからである。しかし、そうした制度に服従し、それらをうやうやしい、従順で、謙虚なものに—あるいは自立的で攻撃的で横柄なものに—ならしめる確かな感情の様式を受け入れる個々人や集団が、危機に瀕していることを示すのは、しばしばとても難しい。さらに、同じように、われわれが住むシステムには多くの「隠れた損傷」や、われわれが必然的に分節化できないもののわれわれを誘う、われわれの状況を変化させる、あらゆる種類の原・政治的切望が存在するという事実を、われわれは証明できる。「いつもあなたが言ってきたように、あなたは自分が何をしているのか

知らない。あなたはおそらく何かに向かう道にあると感じているだろうが、あなたはそれが何か知らない」 (Kipnis, 2000, p.44)。例えば、Kipnis (2000, pp.42-43) は非常に頻繁に、混乱の内にあるある種の感情的なユートピア主義と関係する行為として、不倫の感情的な活動を例に挙げている。

いや、もちろん、われわれはこうした個人的な経験を原始革命的な週間の想像的な形式へと昇華したり、社会変容に対するモデルとしての私的なユートピアを維持したいとは思わない。不倫はユートピア的世界のモデルをあなたに必ずしも提示しない。その代わり、そのユートピア主義が具体化する感情—経験、青写真ではない—において、ユートピア主義は抑制される。

心理分析のような分野は、すでになされた暴力や、肉体的なトラウマや裂け目として指標を通して生み出され、あらわにされているその損失を探し出すことに非常に長けている。しかし、同時に、感情的な自由の政治学²²⁾、あるいは生産的になりうるし、それが得ようとする西洋の前提を単に再生産するヨーロッパ-アメリカ的な個人主義に愛着をそれほど持たないようになりうる希望を、われわれは依然として欠いている。人間の個人 (あるいはおそらく分離した者 *dividual* と呼んだ方が良いかも知れない) は、より広くより甚大な社会的諸関係の循環におけるぼんやりとした痕跡としてのみ存在する、という証拠に直面しながら、実際に飛翔する目標指向型の自己中心性のようなものに関わるある種の自由 (Porter, 2003)。Reddy (2001, p.114) が言うように、

感情とは学習された応答、社会的構築の生産であると感じる人は、この感情によって—政治的な意味で—抑圧されうるのだろうか。西洋で用いられる感情の概念は、深く信奉されている個人の目的と結びついている。恐らく、ある人の配偶者に対する愛情、あるいは敵に対する恐れは、その人が本当に欲する事物によって動かされるに違いない。ある人が彼あるいは彼女の最も真正で深く維持された目的によって抑圧されうることを捉えることは困難である。特定の人、集団、共同体が政治的に—それと知ることなく—抑圧されているという主張をするには、ある人が個人的なる者の性質についての何かを断言するための準備が必要となる。明らかにそうした主張は、あらゆる所与の「文化」

の媒介変数の外側にある、普遍的に構成された個人を利用する必要がある。今日、この政治的に緊張した問題に関する積極的な主張を、向こう見ずにも誰が行えるのだろうか？

以下では、それゆえ私は四つの「それを乗り越える冒険」(Bloch, 1986)を提示し、新しい政治的な強さを形作り、さらにそれらの周りに集まっている、そしてそのそれぞれはこの論文の最初の部分で導入した情動の諸形式の一つと一致する、規律、はっきりとした可能性、希望の付随的な説明を形成しようとしている。それぞれのケースで、いくつかの複雑さが存在する。その中でも注目に値するのは、これらの知識は純粋無垢ではないという事実である。それぞれは新たな種類の政治的倫理と同時に、John Allen が論考の中で指摘したような権力・知識の新たな形式を得ようとする奮闘ぶりを示している。例えば、私が前景化しようとしている情動に関する指向のそれぞれは、大体は資本主義的企業によって、その環境を理解し、また新たな製品をデザインするためにすでに利用されてきた。しかしそれらは、世界的な政策における近年の実験のいくつかにおいては、単にそこにはそこ以上のそこがあると認識することによって、政治的なものとの関わりを変化させようとする、最上の希望の一つを提供もする。

私は、身体化された実践と結びついたある種の情動を熟考することで始めたい。この研究の立場が持つ政治的な目的は、われわれが新たに感情的に緊張した開示的空間を積極的に受け取ることを可能にする、巧みな構成要素として最も上手く表現される。受容力のある実践の特権化は「実践の変化する様式に対する受容力により構造化される一方、管理された柔軟性によって開放性の実質的な効用を取って変えているように見える」(Spinoza, et al., 1997) ヨーロッパ-アメリカ的な文化へと近年突入しているものの多くと対照的である。それゆえ、全ての事例での政治的なプロジェクトは「最上の存在論的な効用」(Spinoza et al. 1997)へと受容力を変化させることができる。しかしもちろん、受容力のはっきりとした原則は提示され得ない。むしろ、位置づけられるのは、ヴァレーラ Varela のような著述家によって描かれた種類の政治的倫理のような何かである。ここで私は、いくつかの要求を満たす明示的あるいは

は暗示的な約束に依存することのない、新たな実践を生産するという任務に応えるために生まれた情動の新しい形態を理解する可能性を強調するヴァレーラを挙げておこう。彼にとって、良い判断で状況へ入っていく行動からの 0.5 秒遅れを用いる、制度的な変化と身体訓練の結びつきを介して、開かれていくことを学ぶことは可能である²³⁾。そうした政治学は、良い判断を強調することで教育を再定義しようとする企みのひとつかも知れないし (Cf. Claxton, 2000)、あるいはより日常的なレベルでは、それら自体を世界の立証として活動するのみならず難問をも提供することに対するその主体の関心を包み込むことができる、際だった新たな「情動的な」コンピューターをつなぎ合わせる計画のひとつかも知れない。

情動の種類の一つめは、トムキンスによって作られた情動の心理分析的なモデルと結びついており、それは「容赦のない自己増殖、抑圧的な前提の適応可能な構造」(Sedgwick, 2003, p.12)の外側へ向かおうとしている。ある意味でこれは、明らかにフーコー主義的なプロジェクトを続けようとする企みである。別の意味では、Sedgwick (2003) が「エージェンシーの中距離」と呼ぶもの設定によってそれを乗り越えようとするものである。

[フーコーの:スリフト挿入] 表象と解放の間の擬似二元論的分析は、覇権的かつ破壊的なものより抽象的に物象化された形式において、多くの場合、概念的再賦課へと導いてきた。そうした賦課が持つ一見したところ倫理的緊急性は、物質の漸次的な撤退をもたらし、それはある意味で「ヘゲモニー」を現状(つまりそうである全てのもの)に対する新しい名前へとグラムシ的・フーコー的に転換し、ますますそれ(極端な場合、フーコーの議論では、最初の場所で抑圧的な前提を定義してきた「消極的な関係」と同じもの)との純粋に否定的な関係の中で「破壊分子」を定義する。……現状を物象化することにつきまとうもうひとつ別の問題は、エージェンシーの中距離に対して行うことである。危険にさらされたものに対するある関係は、敏感で二股になっている。それは消費者に関わる。人の選択はこれを受け入れたり拒否したり(買ったり買わなかったり)、あるいは切迫感あるいは自由意志の極限のみを劇的に表現することで、その明示を制限したりする。さらにそれは、効果的な創造性あるいは変化のための空間を提示するエージェンシーの中距離に過ぎない (Sedgwick, 2003, pp. 12-13)。

とりわけ、ここでは情動、野望、リスクといった異なる範囲に取りかかり、それゆえにさらに加工されうる積極的なエネルギーを解放する修復的な位置を手にすることによって、否定的な情動（例えば偏執症）に取り組むことが可能になる。痛みを未然に防ぐのではなく、喜びを探すこと。この場合も、われわれがここで知るの、倫理的な原則である。

そうした修復的な知のプロジェクトはもちろん、知識とは何かという問題に別の次元をもたらす知識に対する情動的な定位を生産する手段として、常識になっている。私はここで、思考と外延の両方における情動的な応答と抵抗することで、情動の連携が次第に認知的なシステムの性質と中身を変化させることができるようになってきている、性的なアイデンティティとエスニックなアイデンティティをめぐる闘争やポストコロニアル的闘争の圏域に関する多くの研究を考えている。

情動の第三の種類は、スピノザやドゥルーズによって提示される伝統の中にある。そのうちの一つは非常に一般的なものである。それは傾向のモデルである。ここでの単純な政治的責務は、生物が参入できる潜在的な相互作用を押し広げ、全ての生物と同様に「遊び」の余白を広げることであり、かなりの程度われわれの知覚の様式の効果が持つ変容を増大させることである。Massumi は、カルチュラル・スタディーズのこれからの使命と関連づけながら、この種の「仲介者的」アプローチを梓づけている。

もしラディカルなカルチュラル・スタディーズが、それ自身をあらゆる種類のモデルとして打ち立てることを準芸術的に拒絶するなら、そしてさらに伝染の力を欠いたままだったら、それはどうしたら効果的でありうるだろうか。どのような様式の有効性で、それはそれ自身のために実現できるのだろうか。それらの集合的な値引き、進行する変容を超えた自己の利益を発展させたりははっきりと表現したりするように自由に推奨された相互の調節、闘争、交渉のプロセスで、拡大された経験の領域が満たされていることを考えてみよ。もし、それがその（マゾヒスト的な？）自己の利益の除外をもたらすことができるのなら、感情に支配されているものの、そしてさらに無関心となった加工ラインの不調和は、強力な現前となるかも知れない。常に経験的な領域で進行する相互的な再調整は、それが自身をそのようなものと思おうと思わなかつと、

政治学の追究を生態学的な取り組みにする。……これがポリティカル・エコロジーである。ポリティカル・エコロジーの「対象」は好意的な特殊性と発散的な生の形式と一緒にあってやって来たり、あるいは集団をなしたりする。その客体は等身大の自然・文化の連続体に沿った「共生関係」である。カルチュラル・スタディーズの自己への無関心は、そのようなものとして共生関係の横に、特権的な場所をそれに与えている。カルチュラル・スタディーズが自分自身のプロセス的な可能性を表明する方法を見いだすとすれば、それは共生関係・傾向に感情的に関与するポリティカル・エコロジーである。

このアプローチは、ある人には少しばかり高くて並はずれたものと映るだろう。だから、この新しい政治的な方向のカタログを終わらせるために、少し違った方向を取ることにしよう。

ここで私は、すでに指摘したことだが、これまで批評家から無視されてきた思考の登記のいくつかを目論む政治学の考えに焦点を当てることとする。この中で、権力は信条と操作の豊かな新たな領野として記される。この政治学のモットーは、ニーチェ（1968, p. 263）による「二つの思考の間には、あらゆる種類の感情が戯れている。しかしその動きは非常に速いので、われわれは気付くことができない」という一文に表せるかもしれない。しかし今日、「映画、テレビ、哲学、神経生理学、日常生活の中にあるカウンターループの濃密さ」は、われわれが思考と情動の間の領域を理解し、その中で作用するだろう「神経政治学 *neuropolitics*」（Connolly, 2002）を概説し始めている。それは、政治的な概念と信条は決して「具体化されない議論の徴候」に還元されえない。「文化は多数の層を持ち、それぞれの層は言語的な複雑性の特別の速度、能力、階層によって特徴づけられている」（Connolly, 2002, p. 45）。この思考の地質学の一つの例と差異とアイデンティティを考えてみよう。この領域での政治研究は、情動をないがしろにして意味作用を前景化する傾向を取ってきたし、それゆえ他の新しい概念や信条を染みこませることによってのみ変化されうる概念と信条の平板な世界として、文化を成立させてきた。ハビトゥスのような概念を介して、日常生活における思考の予想のつかない変動を指摘する（そして飼い慣らす）ことは可能だろうが、それこそが文化を支持してい

る。しかし、差異とアイデンティティはそのようなものではない。それは、それぞれの組織と複雑性を持ついくつかの登記の中で作用する。それゆえ、

第一の登記では、それは大多数の実践から逸脱すると定義された少数派である。第二のそれでは、決定的な大多数などないある設定において、それは他の選挙民とは異なる少数派である。第三のそれでは、(主観的あるいは間主観的)アイデンティティにおいて、それ自身支配的な傾向によって曖昧にされ、抑圧され、値引きされる—信心深いクリスチャンが、日々の会話や教会での回顧のためではないつかの間の健忘症や疑いによって存在すること、あるいは、攻撃的な競技者が、意識は身体の死とともに停止するという信条に注意を向けないとき、死後へ生を進めようとそれとなく目論むことと、それは同じようである。差異の第三の登記は、第四のそれへと消えゆく。そこでは具体化されたエージェントのヴェールの中にある、あるいはその周辺、余剰、痕跡、騒音、責任が、原始の思想や判断がともに残忍なので洗練された方法では概念化しえないことを表明しているが、判断が形成され、穴だらけの議論が受け入れられ、別のものが重要性を増すような選択的な方法との違いを作り出すのに十分な、強さや効果をまだ有している。そして層化され、織り込まれた文化においては、文化の議論は常に多孔的である。そうしたつかの間の蓄えが、概念や信条の世界を動かすために存在し、強調し、屈曲し、それを支える、騒音、どもり、ジェスチャー、外見、アクセント、驚き、のどの音、バック症、リズムカルあるいは非リズムカルな動きによって、もちろん表象されえないものの、示されるかもしれない (Connolly, 2002, pp.43-44)。

だから、われわれは関のマイクロ政治学を必要とする。その多くは行為と認識の間の 0.5 秒遅れにおいて作用し、マイクロ政治学は、新しいものにますます影響を受けやすく、また効果的な表出を作り出しながら、それに作用を及ぼす知識やテクノロジーを時には脅かしもする、この領域に現れるある種の文化的でもある生物学的運動を理解する。それは、確かな理由はよく分からなくても、その適切さを否定することもなく、政治的な生の議論の不十分さを認識している。そうしたマイクロ政治学は、三つの互いに深く関係した構成要素によって成り立つ思想だろう。一つは擬似フーコー主義的であり、ある種すでに前兆が現れているものの自己の技芸への注目からなる。

第二は、「教化の倫理」で、われわれがすでに一連の一覧表全体に出会っているのに気づいていないもののいくつかを用いることで、世に寛容さを吹き込もうとする倫理・政治的パースペクティブである (Connolly, 2002)。第三のものは、空間と時間の新たな形式が構成されていることにより深い注意を向けることと関わる。新たな時間と空間の形式のいくつか(映画的な時間、動きのイメージ、規格化された空間、探知し後追いつけるための能力)が生み出される時代には、この後者の構成要素はおそらく特に強く求められている。

情動の第四の種類は、新ダーウィン主義的アプローチと関係している。このアプローチは感情の指標としての顔面と顔面性に注目しており、特別な事例研究に注目して次の節で取り上げたい。われわれの多くにとって、つまるところ、「生きている顔は、われわれが対応する最も重要で神秘的な表面である。それはわれわれの肉体の中心である。われわれはそれで食事し、ものを飲み、息をして、会話をするのであり、それは五つの古典的な感覚の内の他の四つをまとめ上げている」(McNeill, 1998, p.4)。それゆえ、西洋文化を結びつける支配的な方法に今やなっている映画の媒介を通して、それに向き合おう。

私がどのように見えるかなど知らない²⁴⁾

ここまでの議論は、具体性を欠いていることで、何かに達しようとしている。最終章で私は、私が同定してきた情動への四つのアプローチ(そして特に顔面に関する新ダーウィン主義的執着)からいくつかの要素を取り上げ、私の議論をあるしつかりとした例にまとめ上げ、また、別のように見えるものを際立たせる技芸として認識されている政治学へとそれらを広げていきたい。私は少なくとも、政治学の最後の種類に当たるもののいくつかの要素に取りかかり、ビデオ・アートの領域(あらゆるスクリーン・アートの中でも)に入っていきたい (Rush, 1999; Ascott, 2003)。この領域を選んだ理由は四つ。第一に、映画やビデオのスクリーンは、ほぼ一世紀もの間存続し、歴史的にストックされている時間と空間の操作のためのレパトリーを用いながら、われわ

れの文化において情動を運ぶ強力な方法となっているから (Doane, 2002)。第二に、利用可能なテクノロジーが表現により一層適したものとなった時代からビデオ・アートはゆっくりと生じており²⁵⁾、多くの上映されたメディアの横断を可能にし、そして今や相互作用的 (映画, ビデオ, ウェブ, 仮想現実) にもなっている、相異なる時間化と空間化の共通の語彙を生み出しうるように次第になっているから。しばしばパフォーマンス・アートを記録する道具以上のものではない、不鮮明で露骨に輝く過去のビデオ・アートは、注意を促す色, きめ, 動きの程度によって取って代わられている (Campbell, 2003)。第三に、ウェブのような新しい発明は、作品がギャラリー中に詰め込まれているときには、参加することが叶わなかった大規模で文化的に刺激を受けたオーディエンスをビデオ・アーティストに与えた。そのオーディエンスは、自己定義的な文化的エリートを超えて広がっている。第四に、この作品は情動にはっきりと関わっているから。良い例はロイ・アスコットの「熱情はアトラクションを食した」(Amin and Thrift, 2002 を見よ) というフーリエの理論に基づいたテレマティック・ラブの考えで、「いかなる再帰性にも勝る自然によってわれわれに与えられた活力は……熱情の一致と……結果としての普遍的な統合へと向かう」(Fourier, cited in Shanken, 2003, p. 75)。この基底に、アスコットはテレマティックな世界的政治を打ち立てる。そこではテレマティックスは認知と情動の両方である持続的な交換に基づいた、グローバルにネットワーク化された意識²⁶⁾の端緒を形成する。アスコットは、そうあるであろう生をイメージするための機械として動く、この前提に関わる一連の芸術作品を打ち立ててきた。

しかし、それだけが私がビデオ・アートに向こうとする理由ではない。それは、それが動きや感情のエネルギーについての何かを見せてくれ、そうした関係性が、私が上で指摘したように、顔面が主に占める動く光のつぎはぎであるスクリーンが、都市空間をますます満たし、顔面が生よりも大きく現れるポスト社会的な世界を生産することで、表現のユビキタスとなり、規範的な方法となっているからである。(Balazs, 1970)²⁷⁾。この冒険の中で自分を助けるために、私はビル・ヴィオラ Bill Viola (1995,

2002) の研究を招きたい。なぜ彼なのか²⁸⁾。三つの理由を挙げておこう。第一に、私にとってとても重要なことだが、彼がオーディエンスの真の反応を獲得しているからだ。彼の研究は理解力を持つ。その研究における不自然な自然主義と彼が企てる魔法的なリアリズムの混合は、見物人を混乱させ、それは時に激しい。彼の展示会は人気があるばかりでなく、定期的に精神医学的なものに横断しているように見えるオーディエンスにおいて、極端に感情的な応答を生産している (cf. Gibbons, 2003)。

第二に、何世紀もかかって発展した琴線にふれながら、情動の意識されざる歴史に故意に関わる一連の描写を通して、彼は情動に積極的に関与しているからである。別言すれば、しばしば数秒のうちで、療法的かつ、おそらく正しく言えば償却的でもある現代の過去の考古学を、ヴィオラは生産している (Buchli and Lucas, 2001)。最低でも、この考古学は現代の過去に対するその後の歴史や地図作成法を想起させる。すなわち、

・中世やルネッサンスからのキリスト教の苦悩、あるいは他のキリスト教的想像の歴史や表象。これは古代のギリシャ語「バトス」(単に「あるものに起こる何か」を意味する) へと遡る描写の伝統であり、この語が、イエスの苦しみや十字架の死を名付ける受難に関するキリスト教的観念と結びつけられ、感情を深く背負い込むようになる (Meyer, 2003)。

・人相学の初期の歴史からの、はっきりとした顔面に関する確かな科学的表象の歴史 (Le Brun の 17 世紀における極端な感情によって運ばれる顔面の描写におけるように)、つまり、顔面の筋肉組織や表現に関する 19 世紀の解剖学者や物理学者の記述を経て、Rejlander によるダーウィンの研究に対する注意深く行われた写真の寄与や、さらにはいわゆる情動の科学において発見された顔面への近年の関心に対するものへ至る歴史。

・人間の知覚に関する科学的な実験の、ホップ、ステップ、ジャンプの遅れ。例えば、それは 19 世紀のドイツの心理物理学において見いだされた。系図学は人工頭脳学のフィードバックの輪の創造と操作可能化の歴史を介して、印章やブランドの最小の現前において発見される資本主義的生活の初期の形式へと至るものとして跡づけられうる。

・素早く過ぎ去る、そして特に無声映画の肉薄した観察において見いだされるある種の力強い顔面性を可能にする、無声映画のリンクされたイメージにおけ

るリアリティの技術的な再生産とともに始まる、知覚される攻撃 (Moore, 2000)。そして、とても近くに迫り、衝動的な印象をわれわれに与える、ベンヤミンやエプスタインが最も好んだ「生のヴィジョン」(Crary, 1999)。「映画は動き、情動を提供する、つまり刺激する能力でもって基本的にわれわれを『動かす』」(Bruno, 2002, p.7)。さらに、顔面の器用さでもって感情の動きを示し、クルーを見たり捜したりする複雑なプロセスにおいて観客を巻き込む俳優のディレクターによる使用において、人相学と直接にリンクする (Taussing, 1999; Bruno, 2002)。

・われわれがその物質的な現れにおいてモノ指向である世界に出会う／を感じる、ある種の不断の視覚的分類法を提供する、近代的なニュースや写真のクリンエ。

・近代的な顔面認識システムの辛口の概要に対するオリゴブティック^{訳注 2)}なまなざし。それは大量の監視システムにおいてますます用いられており、その系図学は再び人相学へと戻ろうとしている。

・行動主義的なアート、多様な人工頭脳学モデル、キネティック・アート、全般的な相互作用性のような運動の遺産に基づいた、ビデオ撮影された顔の核を捉えるための、パフォーマンスや多様なパフォーマンス・アートによる近年の取り組み (Ascott, 2003)。

例えば、ヴィオラは、この多様な歴史的／地図作製法的遺産を、中世の屏風画が持つ多様な画面を想起させる、最新の LCD フラット・スクリーン上のクローズ・アップしたそしてスローな映像を用いることで成立させる。そのような方法で時間を押し広げる描写は、日常生活のあちこちでわずかに認識される、感情のニュアンスを観察することを可能にする。それらは注意深く舞台化され、台本が書かれ、時にはスタントの人びと、何百ものエキストラ、スクリーン・デザイナー、セットを当てる日と、映像監督、衣装係、メイク係、照明係といった一群と同時に、膨大な数の俳優を巻き込む。高速でのフィルムには制限があることを考慮すると、それらは長さで言うと一分以下で撮影される (Wolff, 2002)。明らかにその目的は、顔面の表情や身体の動き (そして最も明らかなことにそれは手である)、照明のパターン、別の空間的な形式を、感情や身体の形が強さの行動において一致する「荒れ狂う表層」を提示することで、はっきりとした方法で相互に作用するようにすることである。同時に、パフォーマンスの統合的な部分として擬似テキスト的な要素 (フレームや

時間等)を抑えながら、その描写はそれ自身の操作を意図的に提示する。

第三に、ヴィオラの作品はしばしば無視される都市の側面を提示する。とくに、彼は情動の主たる構成者、現前の主たる作成者として、顔面への注目に関心を寄せる (Taussig, 1999)。ヴィオラは感情の色を持つ車輪として顔面を捉え、情動の連続体のシフトを示す流れとして感情を位置づける。しかしそれは単なる顔面ではなく、よく言われるのは、ヴィオラは情動の指標として手も考慮している (Tallis, 2003)。彼はまた、より一般的な対処の刺激の実践を指標にするために、体全体も用いる (cf. Thrift, 2004)。それは、顔面の海としての、手の森林としての、哀悼の海原としての都市。ブロックや石とちようど同じだけ、近代的な都市化の建築ストックがある。換言すれば、ヴィオラは、顔面と手と涙の年代記として理解される、都市の情動的な歴史を提示する。これが、しばしば無視される一連の情動的な実践を前景化することによって語られる、情動が現れる方法の一連の歴史であり、それによってそしてそれとして情動がその方法を作り上げる究極的な地理である。それは幻想を見たり、祈ったり、泣いたりすることであり、それぞれが文化史をもっている。しかしヴィオラはまた、こうした忽然とした実践は、通常、それ自体が彼の中位の対照となりうるような、日々の一部であるということに十分自覚的でもある。日常の鎖は、常にじりじりと前進し、進行するたびに作り替えられる精神的な実践として現れる。

しかし、そうだとしたら、ヴィオラの「ゆっくりと転回する物語」の何が政治的に重要なのだろうか。私は、それは3つのことだと考えており、それぞれの要素はそれ以前のものよりも重要である。第一の要素は、われわれが情動を発生させることを知ること、擬態の複雑なプロセスを示している。それを示すことで、ヴィオラは、身体のそれぞれの要素が (そしてとりわけ顔面が) 自身のせめぎ合う文化史を持つ感情の提示に参加する様子を見ることができる。彼は顔面のような身体の明示的な要素のある種の情動的な歴史地理をわれわれに提示し、擬態³⁰⁾や、生まれて以降何世紀にもわたって作られてきた、きわめて完全に過去からの意味の開放をもたらす他のプロセスを通して、われわれの身体が社会化され

ることを地図化する。情動の空間的な動きを地図化することは、特にオリジナルなことではないだろうが³¹⁾、ヴィオラはそれを、われわれが幼少期から学ぶ強さの文化的シニフィアンとしてわれわれに現れる審美性の合図すべてを用いることで、美しく行う。言い換えると、オーディエンスは、こうした物質的な記憶をおのおのの身体で再生し、療法的なものとして合法的に描かれうる方法でのヴィオラの描写の漸次的なプロセスを通して、それを拡大しながら、感情的学習のプロセスに反応する。

第二に、ヴィオラは情動を空間と時間に埋め込む。それらがアイロニー的な人間の顔であろうと、彼の舞台設定は、満ちあふれた田舎の散策あるいは家屋が、注意深く示された空間的かつ時間的な変容である。それは読む一書く一テキストというパラダイムに抵抗するものの、依然として多様な感情と動きの形式としての、非常に警戒的なオーディエンスにとって理解可能である。その視覚的「語彙」は、空間と時間のよく知られた地平を引き裂き、別の物でもありえたことや、こうした新たな配列が新しい情動的な共鳴や源泉を提供するかもしれないことを示す。空間と時間に作用することで（引き延ばし、変容させ、縮小させることで）、それらはある種の感情に対する脱殻の場となり、そこでは新しい本能的なやりとりが行われる。クラカウアーはかつて、映画は現実にふれることでわれわれを元に戻す、離別の贖いの芸術だと言った（Carter, 2002）。全くもって、それは大きすぎる言明である。しかし、ヴィオラの例は、彼の願望に対するいくつかの妥当性を産み出しているようだ（cf. Viola, 2003）。

第三に、ヴィオラは近代世界の初期の情動の形式についての何かを見せることができる。というのは、それらはスクリーン上で作られ、非常に小さな闊的な空間と時間においてのみ存在する、ある種の直感的な速記として、都市の身体や他のものの中に送られる。Marcus（2002）は次のように書くことで、それをうまく指摘している。「映画が国民の民俗の一部となるとき、映画と国民の間の境界は消え去る。映画は寓話となり、その後にはメタファーになる。それからそれはキャッチフレーズ、ジョーク、ショートカットになる」。ヴィオラは、西洋文化を代表する情動的なキャッチフレーズ、ジョーク、ショートカ

ットをわれわれに提示するが、スローモーションやクローズ・アップを通してももとの漸次的な性質へと戻すので、われはそれらが動いているところを見ることができる。非表象的なそれらを描写することは難しいが、われわれが通常は大きな指標と同種の何かとしての日常生活に関わっている、ささいなそして図表的な手がかりをヴィオラが示してくれるので、われわれは依然としてそれらを感知することができる（Ginzburg, 1992）。

もちろん、ヴィオラが指摘するのは普通の政治学ではない。しかし、われわれがそのようにつくられること、そのように結びつけられることの問題が問題外の何かとして認識されないかぎり、彼が注目するものは、確かにきわめて政治的なプロセスであり、それは人間に関わる問題である。この種の情動の政治学抜きで、政治学は人間であるべきものをやつれさせるある種の男性的なプログラム作成をつかむことはできない。なぜなら、それが何であり、あるいは何になるのかをそれはすでに確かに知っているからだ。

結論

簡単に結論しよう。政治学に関する多くの記述において日常的に認識されている以上の世界が存在し、この過剰は偶発ではない。それは、政治学の一部であり、それに単に付帯しているわけでもない小さいもの、汚いもの、間に合わせて粉飾されたものを読むことを可能にする、社会科学や人文学におけるつかの間の研究の方向に向いている。それはまた、諸事物を明示的な政治学として結びあわせるものを考えることにより、知識と情熱（そして、自然と文化、人間と事物、真実と力）の古代的な設定を放棄しようとする研究の方向に向いている（Stengers, 1997）。とりわけ、われわれが説明したり話し合うための出発点に過ぎない、都市の空間との遭遇の政治学について思考する中での実験において、これら二つの「伝統」が混淆されてきたため、われわれは刺激的な時間にあると私は思う。

とくに、私は社会科学とアーティストの間の連携の結果として近年受け取られている作品で、本稿を

締めくくろうとした。科学とアートの結婚はしばしば「エンジニアリング」と呼ばれ、これは私には現在生成されるある種の理論的・実践的知識に対する適切な言葉のように思われる。この知識は、われわれの世界への関与をいっぺんに変化させうる、その場限りのもののその場限り³³⁾の知識である。本稿で扱われたいくつかの問題を提示しようと格闘する中で、新たな種類の文化的エンジニアリングの基盤は次第に構築されており、機能的な不一致として民主主義を価値付ける政治的実践の新しい形式がその上に、そしてそれとともに作られうるだろう。私は、この種のエンジニアリングの実験が本質的に取るに足らないことだとか、われわれは「現実の」物事に立ち返るべきだというコメンテーターを何度も聞いてきた。でも私は説得されない。私は全く説得されていないのだ。それは私にとって、何の選択もなされていないように思われるからだ。われわれは古い形式の政治学や、以前と同様に活潑な政治的なるものの多くを説得しなければならないが、われわれはまた、政治的なるものの覆いを拡張できるであろう「調査と展開」も必要である。この両者によってわれわれは、「人間」が崩壊した倫理的かつ政治的な沈思の空間を再構築し、新たな政治の形式を存在に持ち込むことができるのだ。もしわれわれがそうしなければ、別の人たちが確実にするだろう。

注

- 1) 本稿はドリー・マッシーからの、もっと深く情動の政治学を考えよという挑戦によって書かれた。これが、私がいよいよしてきたことだ!
- 2) この感情の労働力は、予期せざる場所に現れうる。大きな投資銀行の貿易フロアの例を挙げてみよう。「トレーダーはしばしばそしてかたくなに感情の管理の必要性を口にし、彼等は感情の管理をプロフェッショナルなトレーディングの専門技能や常識の一部と考えている」(Knorr Cetina and Bruegger, 2002, p. 400)。最後の三つの例はKatz (1999) のセミナーブックから挙げた。
- 3) 例えば、なぜこうした、他の事物としての主題にアプローチしない、笑いや涙の都市の研究がないのだろうか。
- 4) 勇敢さ、スタミナ、勇気といった美德は、人間の当座の欲望を抑制することから生じる。この点に関する別の良い例は、ソフォクレスの『アンティゴネー』で、そこでは、プラトンが非難する手段で同じような批判が生じて

- いる (Butler, 2002)。悲嘆に暮れ彼女を裏切った弟を埋める権利に対するアンティゴネーの主張は、スペクタクルが公的な判断の蝕むことから、その状態を悪化させる。
- 5) もちろん、政治的に有徳だと考えられてきた哲学の歴史を介する感情が存在する。知性への愛は、プラトンさえも (『シンポジウム』の中で) 愛の危険な凶暴さやその他の強情さから別たれて欲しいと願ったものである。ヘーゲルは望ましい感情として愛と嫉妬に言及した。等々。
 - 6) Reddy (2001) は両方の領域に良いレビューを行っている。実際、あらゆる時のあらゆる社会に共通の感情の状態が存在するように思えるが、同じように、全くもって不一致の状態もある。
 - 7) 例えば、Ekmanの研究は顔面に関する Tomkinsの研究によって強く影響されている。ドゥルーズの研究はペイトンソンに対するガタリの肩入れに影響を受けている。そしてグレゴリー・ペイトンソンやチャールズ・ダーウィンの亡霊は、まったく絶え間なく、背景に伏在している。
 - 8) こうした身体的資源は多様で、その多くは十分に考慮されてきた。例えば、最も力強い身体的コミュニケーションの方法は、明らかに接触である。遭遇のタイプによると、それは不安定性や禁制の感情と同時に、愛情や喜びの感情を生産しうる (Montagu, 1986; Field, 2001)。言い換えると、接触は主要な接触の器官として、大きな生物的・文化的複雑性であった複雑性の外延として、手を考えることができる (握手、敬礼、拍手、その他、書いたり、恋人同士の接触のような多様な方法をただただ考えてみよう) (Tallis, 2003 を参照)。同様に、手の発展はわれわれの脳の発展において重要な要因であったようだ。たとえば、情動/知性/発達の同じような連鎖は、においやバランスのために見出されうる (Thrift, 2003 を参照)。
 - 9) それゆえ、トムキンスにとって、情動とは、オルガニズムが状況に合わせて作る相関的な応答であり (顔面の筋肉、内臓、呼吸システム、骸骨、血流の変化、発声等々と関係している)、それはそれに影響を及ぼす刺激の強さあるいは特定の変化度の類似器官を生産する。
 - 10) Sedgwick (2003) は、他の音楽を聴いたり、音楽家になるために訓練したりしながらも、何度も繰り返し聞きたいように思わせる音楽の断片の楽しみの例を示す。
 - 11) トムキンスはまた、声と呼吸が決定的だと考えていた。
 - 12) 『エチカ』の有名なくだりで、スピノザはこの思いめぐらしをありのままに挿入している。
精神と身体は同一物であってそれが時には思惟の属性のもとで、時には延長の属性のもとで考えるまでなのである。この結果として、ものの秩序ないし連結は、自然がこの属性のもとで考えられようとかの属性のもとで考えられようとかただ一つだけであり、したがって我々の身体の能動ならびに受動の秩序は、本性上、精神の能動ならびに受動の秩序と同時であるという

ことになる (1951, 170)。

- 13) われわれが恥や気恥ずかしさとして感じるであろう別の感情は、共通の顔の表情を持っているようには思えない
- 14) Ekman (1998, p. 387) は続けて次のように書く。「私は感情的な経験の最初の数秒における、最初の感情-種別の生理学的活動の多くは、社会的経験によって見抜くことができないと考える」。本稿の後半の内容から推察されるように、私はこの声明は正しくないと考えてるが、これは私が生物学区の影響を否定したいというわけではない。
- 15) このことは、われわれは今や、社会的な原則や関係性が「空っぽ」であり、他の文化的な要素や諸関係に、そしてとりわけ客体にとって代わられている「ポスト社会的」世界に生きているという主張に言及している。
ポスト社会の理論は、溶解する「伝統的」社会的統一性、この溶解に対する理由、変化の方向を伴う現象を分析する。それは、社会性の形式としてポスト社会的諸関係を概念化しようとし、人間の相互作用や結束という革新的な概念に挑むが、それにもかかわらず自己と他者の結合の形式を構成する。変化はまた、それ独自に詳細な分析を正統化する人間の社会性を刺激する (Knorr Cetina, 2001, p. 520)。
- 16) たとえば、そうした恐怖の感情を、この種の詳細のへこみによって発生させることは、比較的簡単である (Altheide, 2002 を参照)。
- 17) 例えば、悲しみを病気として解釈すること。
- 18) それゆえ、ますます近代的な教育と訓練のシステムは適応性と創造性の必要性を強調する—しかし非常に狭隘に定義された要素において。それらはしばしばこうした価値を内包するために、パフォーマンスの知識を用いる (Thrift, 2003 を参照)。
- 19) もちろん、いわゆる「半秒遅れ」に関するこの簡単な詳細な説明は、意識的な気づきはただ人任せだという意味ではない。むしろ、われわれは意識化以前のはより高く評価されるし、同時に意識的な気づきは行動に集中し、それを是認する手段として再び位置づけられると言えるだろう。
- 20) 私は Bill Viola の研究を考える際に、このフレーズを再び用いる。
- 21) 私はここで、ウィグマンやラバンといった舞踊術の作品が、ドイツのナチス時代に大衆政治的なイベントに提供されたことについて考えている。
- 22) 例えば、感情的な労働の解放に関する議論は、何を意味しているのか? (Smith, 2002)
- 23) 多くの著者がインスピレーションのために仏教に向かうようになっていることは偶然ではない (Varela, 1999; Sedgwick)。
- 24) Bill Viola が 1986 年に作成したビデオディスクの小見出し (Viola, 1995)。

- 25) ここでの好例は、生成の可視的な流動性の発生である。情動にとって重要なことに、この領域での多くの研究は顔面に集中してきた (Sobchack, 2000)。
- 26) Fourier とは別の、Teilhard de Chardin, James Lovelock, Gregory Bateson のような先駆者がいる。
- 27) Sobchack (2000, p. 185) が言うように、
人間の顔面は……透明性と特質において、「普通の」自然発生的な、生きられた身体のヴィジョンでは不可能と考えられる。もし私が別の物に物理的に近づきすぎると、それが触覚に基づく現前を増大させると同時に、別のものの顔面は私の視覚的領域におけるある形象としての正確な視覚的現前を失う。可視的な顔面は、それが私の視覚的領域を満たすためにぼやけ始め、それゆえある意味ではその基礎となっていく。まさに、その顔面のいくつかは不確定性へと、そして私の遠近法的な活動の地平を示す最終的な不可視性へと流れ込む。私のために映写機によって媒介された人間の究極的な接近……は変形された経験へと差し出される。それは私の視覚的領野の中心に位置づけられる……その全体は私の認識の形象であり、その基盤ではなく、それゆえそれは私の視覚における不確定性へと流れ込むことはない。
- 28) 例えば、ヴィオラの研究はその陳腐な審美性、その偉大な芸術の作品の寄生、情動の狭隘なスペクトラムに対する魅力、等々に対するいくつかによって、非常に批判されてきた。これらは有効な批判であるかも、ないかも知れない。しかし私は、なぜ Viola の作品は第一に強力な感情的な反応を誘発するかに関心がある。
- 29) しばしば、それは非常にゆっくりとした動きだ。例えば、映画はしばしば 300fps で撮影され、30fps で上演される。
- 30) 当初のギリシャの形式では、擬態はパフォーマンスを意味しており (模倣よりも上演や再上演として理解される)、もちろん、擬態は正確なコピーの生産ではない、ということ覚えておくことは重要である (Rush, 1999)。
- 31) 顔面を撮ったスローモーションの映画は、ここしばらく芸術作品として存在してきたが、以前のものと違って、私は、ヴィオラがだらだらと長い実験に適切な速度を獲得しようとしてきたと考えている。
- 32) 「それは、その心理物理学的一致によって、効果的にわれわれが物質世界を発見することを助ける。われわれは誇張なしに、それをカメラを通して探求することで、支配的な状態、その視覚的に非存在の状態からこの世界を救い出す。そしてわれわれは断片化されるので、それを自由に経験する」 (Kracauer, 1960, p. 300)。
- 33) この語を使う中で、私は、エンジニアリングはつねに、世界が反論することを可能にする具体的な遭遇の外側で生み出されることを含意している。私は、エンジニアリングは単なる即興だと言おうとしているのではない。

訳注

- 1) コスモポリティクスは、本来は、ストア学派による特定の都市ではなく人類一般への所属を表現するための語。イザベル・スタンジュールは、自然/社会の近代主義的な決着法でのものとは異なる政治的意味を獲得するために用い、さらにそれをブルーノ・ラトゥール等は社会の継続的構成を示す思考の中で用いている。本稿のいくつかのカ所ではラトゥール独特の語の使用が散見される。翻訳できるいくつかは翻訳したが、そのままラトゥールの語であることを示さぬままにしている語も多くある。逐一の説明ではなく、そうした語の各人による気づきの重要性もまた、本稿の意図であると考えたからである。
- 2) このオリゴプティックもまたラトゥールの造語で、学問分野の枠組みを強調する際に用いられる。

参考文献

- ABOTT, A. (2001) : *Time Matters*. Chicago, IL: University of Chicago Press.
- ABU-LUGHOD, L (1999): *Veiled Sentiments. Honor and Poetry in a Bedouin Society*. Berkeley: University of California Press.
- ALTHEIDE, D. L. (2002): *Creating Fear. News and the Construction of Crisis*. New York: Aldine de Gruyter.
- AMIN, A. and THRIFT, N. J. (2002): *Cities. Re-imagining Urban Theory*. Cambridge: Polity Press.
- ASCOTT, R. (2003): *Telematic Embrace. Visionary Theories of Art, Technology, and Consciousness*. Berkeley: University of California Press.
- BALAZS, B. (1970): *Theory of the Film. Character and Growth of a New Art*. New York: Dover Press.
- BALIBAR, E. (2002): *Politics and the Other Scene*. London: Verso.
- BATTERSBY, C. (1999): *The Phenomenal Woman*. Cambridge: Polity Press.
- BERLANT, L. (ed.) (2000): *Intimacy*. Chicago, IL: University of Chicago Press.
- BLACKMAN, L. and WALKERDINE, V. (2001): *Mass Hysteria. Critical Psychology and Media Studies*. London: Palgrave.
- BLOCH, E. (1986): *The Principle of Hope*, (three vols). Oxford: Blackwell.
- BOLTANSKI, L. (2002): The fetus and the image war', in L. ATOUR, B., WEIBEL, P. (eds): *Iconoclasm. Beyond the Image Wars*. Cambridge, MA, MIT Press, pp. 78-81.
- BORDWELL, D., CAROLL, D. (eds) (1996): *Post-Theory. Reconstructing Film Studies*. Madison: University of Wisconsin Press.
- BOURKE, J. (2000): *An Intimate History of Killing*. London: Granta.
- BRONTE, C. (1847/1993): *Jane Eyre*. Oxford, Oxford University Press.
- BRUNO, G. (2002): *Atlas of Emotion. Journeys in Art, Architecture and Film*. New York: Verso.
- BUTLER, J. (2002): *Antigone's Claim. Kinship Between Life and Death*. New York: Columbia University Press.
- CAMPBELL, P. (2003): 'On video', London Review of Books, 11th September, p. 14.
- CARTER, P. (2002): *Repressed Spaces. The Poetics of Agoraphobia*. London: Reaktion.
- C ASTRONOVO, R., NELSON, D.D. (eds) (2003): *Materializing Democracy. Towards a Revitalised Cultural Politics*. Durham, NC: Duke University Press.
- CLAXTON, G. (2000): *Wise up. The Challenge of Lifelong Learning*. London: Bloomsbury.
- CONNOLLY, W.E. (2002): *Neuropolitics. Thinking, Culture, Speed*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- CRARY, J. (1999): *Suspensions of Perception. Attention, Spectacle and Modern Culture*. Cambridge, MA: MIT Press.
- DAMASIO, A. (1999): *The Feeling of What Happens*. London: Vintage.
- DAMASIO, A. (2003): *Looking for Spinoza. Joy, Sorrow and the Feeling Brain*. London: Heinemann.
- DARWIN, C. (1998/1872): *The Expression of the Emotions in Man and Animals*. London: Fontana.
- DAVIDSON, R.J., SCHERER, K.R., GOLDSMITH, H.H. (eds) (2003): *Handbook of Affective Sciences*. New York: Oxford University Press.
- DAWKINS, R. (2002): 'Thoughts of Deleuze, Spinoza and the cinema', *Contretemps*, 3: 66-74.
- DELEUZE, G. (1988): *Spinoza. Practical Philosophy*. San Francisco, CA: City Lights Books (『スピノザ実践の哲学』1994, 平凡社, 鈴木雅大訳) .
- DELEUZE, G. (2003): *Les Cours de Gilles Deleuze. Deleuze/Spinoza. Cours Vincennes 1981* <http://www.webdeleuze.com/php/texte.php?cle34&group> pe last accessed 2nd December 2003.
- DELEUZE, G. and GUATTARI, F. (1994): *What is Philosophy?* London: Verso.
- DEMOS, E.V. (ed.) (1995): *Exploring Affect. The Selected Writings of Silvan S. Tomkins*. Cambridge:

- Cambridge University Press.
- DOANE, M. A. (2002): *The Emergence of Cinematic Time. Modernity, Contingency*, The Archive. Cambridge, MA: MIT Press.
- EKMAN, P. (1995): *Telling Lies. Clues to Deceit in the Marketplace, Marriage and Politics*. New York: Norton.
- EKMAN, P. (2003): *Emotions Revealed. Understanding Faces and Feelings*. London: Weidenfeld & Nicolson.
- EKMAN, P. and ROSENBERG, E. (eds) (1997): *What the Face Reveals*. New York, CA: Oxford University Press.
- ELKINS, J. (1999): *Pictures of the Body. Pain and Metamorphosis*. Stanford, Stanford University Press.
- FIELD, T. (2001): *Touch*. Cambridge, MA: MIT Press.
- FISHER, M. (2002): *The Vehement Passions*. NT: Princeton, Princeton University Press.
- GEURTS, K.L. (2002): *Culture and the Senses. Bodily Ways of Knowing in an African Community*. Berkeley. University of California Press.
- GIBBONS, F. (2003): 'Display of passion which will end in tears'. *Guardian*, 5 July, p. 11.
- GNZBURG, C. (1992): 'Clues'. *History Workshop Journal*.
- GRAY, J. (2002): *Straw Dogs. Thoughts on Humans and Animals*. London: Granta.
- GROSSMAN, D. (1996): *On Killing. The Psychological Cost of Learning to Kill in War and Society*. Boston: Little Brown.
- KATZ, J. (1999): *How Emotions Work*. Chicago, IL: University of Chicago Press.
- KIPNIS, L. (2000): 'Adultery', in BERLANT, L. (ed.): *Intimacy*. Chicago, IL: University of Chicago Press. pp. 9-47.
- KNORR CETINA, K. (2001): 'Postsocial relations: theorizing sociality in a postsocial environment', in RITZER, G. and SMART, B. (eds): *Handbook of Social Theory*. London: Sage, pp. 520-537.
- KNORR CETINA, K. and BRUEGGER, U. (2002): 'Inhabiting technology: the global lifeworld of financial markets'. *Current Sociology*, 50: 389-405.
- KRACAUER, S. (1960): *Theory of Film. The Redemption of Physical Reality*. New York,
- LATOUR, B. (2002): 'Gabriel Tarde and the question of the social', in JOYCE, P. (ed.): *The Social in Question. New Bearings in History and the Social Sciences*. London: Routledge, pp. 117-132.
- LATOUR, B. and WEIBEL, P. (2002): *Ice and Fire. Beyond the Image Wars*. Cambridge, MA: MIT Press.
- MCCARTHY, A. (2001): *Ambient Television*. Durham, NC: Duke University Press.
- MCCRONE, J. (1999): *Going Inside. A Tour Round a Single Moment of Consciousness*. London: Faber and Faber.
- MCKENZIE, J. (2001): *Perform or Else. From Discipline to Performance*. New York: Routledge.
- MCNEILL, D. (1998): *The Face. A Guided Tour*. London: Hamish Hamilton.
- MARCUS, G. (2002): *The Manchurian Candidate*. London: British Film Institute.
- MASSUMI, B. (2002): *Parables for the Virtual. Movement, Affect, Sensation*. Durham, NC: Duke University Press.
- MEYER, R. (2003): *Representing the Passions. Histories, Bodies, Visions*. Los Angeles, CA: Getty Research Institute.
- MONTAGU, A. (1986): *Touching. The Human Significance of the Skin*. New York: Harper and Row.
- MOORE, R.O. (2000): *Savage Theory. Cinema as Modern Magic*. Durham, NC: Duke University Press.
- NIETZSCHE, F. (1968): *The Will to Power*. New York: Vintage.
- NOLAN, J.L. (1998): *The Therapeutic State. Justifying Government at Century's End*. Albany, NY: New York University Press.
- NORRIS, P. (2002): *Democratic Phoenix. Reinventing Political Activism*. Cambridge: Cambridge University Press.
- NUSSBAUM, M. (2002): *Upheavals of Thought. The Intelligence of Emotions*. Cambridge: Cambridge University Press.
- OSBORNE, T. (2003): 'Creativity. A philistine rant', *Economy and Society* 32: 507-525.
- PORTER, R. (2003): *Flesh in the Age of Reason*. London: Allen Lane.
- RABINOW, P. (2003): *Anthropos Today. Reflections on Modern Equipment*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- REDDING, P. (1999): *The Logic of Affect*. Ithaca, NY: Cornell University Press.
- REDD, Y. W. (2001): *The Navigation of Feeling. A Framework for the History of the Emotions*. Cambridge: Cambridge University Press.
- REHM, R. (2002): *The Play of Space. Spatial Transformation in Greek Tragedy*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- RUSH, M. (1999): *New Media in Late Twentieth Century Art*. London: Thames and Hudson.
- SCHECHNER, R. (2002): *Performance Studies. An introduction*. London: Routledge.

- SEDGWICK, E.K. (2003): *Touching Feeling. Affect, Pedagogy, Performativity*. Durham, NC: Duke University Press.
- SEDGWICK, E.K. and FRANK, A. (eds) (1995): *Shame and its Sisters. A Silvan Tomkins Reader*. Durham, NC, Duke University Press.
- SENNETT, R. (1994): *Flesh and Stone. The Body and the City in Western Civilization*. London: Faber and Faber.
- SENNETT, R. (2003): *Respect in an Age of Inequality*. New York: Norton.
- SMITH, P. (ed.) (2002): 'Regimes of emotion'. *Special Issue of Soundings* 20: 98-217.
- SOBCHACK, V. (ed.) (2000): *Metamorphing. Visual Transformation and the Culture of Quick Change*. Minneapolis, University of Minnesota Press.
- SPIKES, T. (2001): "Thinking the posthuman: literature, affect and the politics of style". *Textual Practice*, 15: 25-46.
- SPIVEY, N. (2001): *Enduring Creation. Art, Pain and Fortitude*. London: Thames and Hudson.
- STENGERS, I. (1997): *Power and Invention. Situating Science*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- TAUSSIG, M. (1999): *Defacement. Public Secrecy and the Labor of the Negative*. Stanford, MA: Stanford University Press.
- THRIFT, N.J. (2000): 'Still life in nearly present time: the object of nature'. *Body and Society*, 6: 34-57.
- THRIFT, N.J. (2003): 'Bare life', in THOMAS, H. and AHMED, J. (eds): *Cultural Bodies*. Oxford, Blackwell.
- THRIFT, N.J. (2001/2004): 'Summoning life', in CLOKE, P., CRANG, P. and Goodwin, P.B. (eds); *Envisioning Geography*. London: Arnold.
- THRIFT, N.J. (2004a): 'Ageography of unknown lands', in DUNCAN, J.S. and JOHNSON, N. (eds): *The Companion to Cultural Geography*. Oxford: Blackwell, pp. 121-136
- THRIFT, N.J. (2004b): 'Beyond mediation', in Miller, D. (ed): *Materialities*. Durham, NC: Duke University Press.
- TULLOCH, J. (1999): *Performing Culture*. London: Sage.
- TURNER, S.P. (2002): *Brains/Practices/Relativism. Social Theory after Cognitive Science*. Chicago: University of Chicago Press.
- VIOLA, B. (1995): *Reasons for Knocking at an Empty House Writings 1973-1994*. London: Thames and Hudson.
- VIOLA, B. (2003): *The Passions*. Los Angeles, CA: Getty Research Institute.
- WHITE, S.K. (2000): *Sustaining Affirmation. The Strengths of Weak Ontology in Political Theory*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- WOLFF, E. (2002): 'Digital cathedral'. *Millimeter*, 1 February.
- WOLLHEIM, R. (1999): *On the Emotions*. New Haven, CT: Yale University Press.
- Website
BILL VIOLA: <http://billviola.com/> (last accessed August 18th.2003)

邦訳は本文中で使用したもの以外は、参考文献に示していない。